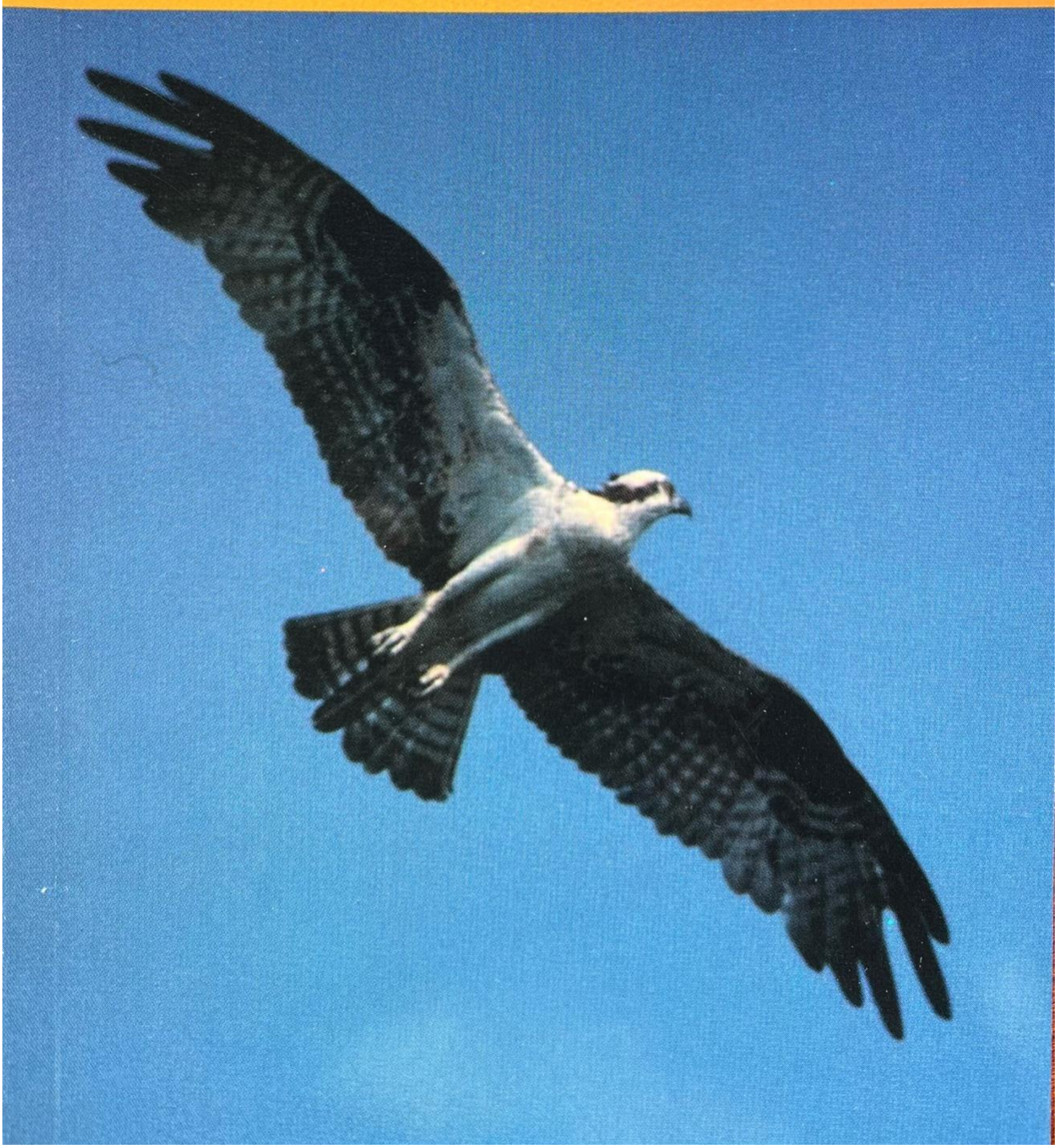
# 真道問答



# 眞道問答

# 真理 Q&A

著者：ジェームズ・ティエン師
発行：真理書房
https://terryyu.weebly.com/

目次

第一篇:求道編 ..... 4
一、神は存在しますか？ ..... 4
二、人生の意味 ..... 6
三、罪の重大性 ..... 8
四、人は死後どこに行くのですか？ ..... 11
五、信仰はどんな宗教でも同じですか？ ..... 13
六、なぜイエス信じるのですか？ ..... 15
七、聖書は真実で信頼できますか ..... 18
第二篇:初信編 ..... 22
一、まず、あなたは救われましたか？ ..... 22
二、なぜ新たに生まれなければならないのですか？ ..... 24
三、主を信じるとバプテスマを受けるべきでしょうか。 ..... 27
四、信者は聖書を読む必要がありますか? ..... 29
五、どのように祈るべきですか。 ..... 33
六、信者は神に仕えるべきですか? ..... 37
七、人間として生きる本分と原則 ..... 40

# 第一篇:求道編

## 一、神は存在しますか？

古来、世界は天地万物を支配する至高の存在を信じてきました。中国では「神様」あるいは「お天道様」と呼ばれ、他の全ての民族も神を信じていました。それは人間の本性であり本能ですが、愚かな者こそ心に「神などない」と言います。(詩篇 14:1; 10:4) 人間が自分の意思でわがままにしていて、神に支配され、自由を制限され、罪を罰されるのが嫌なわけです。しかし、神の存在を否定することはできず、さまざまな方法で証明することができます。ここで数例を挙げます。

(一) 神の創造物

宇宙の全てのものは、それ自体によりまたは自然に理由なく生まれることができません。私たちが普段見ているもののように、すべて人の手によって作られたものです。ですから、聖書は、神と神の創造について最初から話しています。「世界が造られた時から、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(ローマ 1:20)。「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す」(詩篇 19:1)。統計によると、天文学者の 90%が神を信じており、大多数は宇宙の起源を信じています。つまり、宇宙は最初に非常に小さい基本点から爆発し、広げて今の宇宙になっています。聖書の言った通りに、神は無から有を作られ(ヘブル 11:3;ローマ 4:17)天を広げ、張られました(イザヤ 40:22; 42:5)。一般の人が宇宙、地球の働き、生物の構造、人体の不思議の構造を見て、全能、知恵、栄光ある神がこれらすべてを創造されたと信じないわけではないです。そして、太陽、空気、水、その他人間が生存のために必要なすべてのものは、神の素晴らしい、豊かで完全な供給によるものなのに、人間はどうして愛、善、誠実なる神を信じないでしょうか。

神こそ、私たち人間と最も大きく、深い、親密な関係を持っておられます。肉眼で見ることはできませんが、私たちはいたるところで主の臨在を感じ、主の恩恵をいただいています。 神の創造された地球の上に生き、神に養われ、顧みられ、保護されながら、神に感謝せず、神を拝まず、さらには神を否定し、神に反対し、抵抗するのはまさに無知と傲慢の極みであり、その結果は極めて危険で恐ろしいものです。したがって、神がいるかいないかではなく、人間がそれを認めるかどうかが問題なのです。 これは個人で決めることであり、無視し

てはなりません。

(二)人的良心

人間は神がいることを知らないというのは本当でしょうか。天を仰ぎ、万物を見る者は、神なくしては創造できないことが分かります。一方で、ご自分の良心に聞いてみてください。良心は人間の霊における神の賜物の機能です。神は霊であり、人間の心の奥底に、つまり人間の霊に、神を知ろうとする直感があります。真夜中、また森の奥にいる時、「この世には、宇宙には神はいないのだろうか」と自問してみてください。

ある無神論者が友人と山道を歩いていたところ、突然に激しい嵐に遭い、逃げるところなく、渓谷に落ちる危険もあったので、彼はすぐ神様に助けてもらうように祈りました。その後、友人は彼に「神様を信じていないのなら、なぜ祈ったのか」と尋ねましたが、彼は答えられませんでした。これは人間の本性であり、本能じゃないでしょうか。「困ったときの神頼み」ということわざは、人間の良心が神の存在を知っているわけです。けれども、無神論と人間の慢心の影響で神の存在を認めようとしません。しかし、人間が自分の力が果て尽きると、たとえば病気で危篤になったら、初めて良心の呵責で自分の罪を告白し悔い改め、地獄に落ちないよう魂を受け入れてくれるように神に憐れみを求める人が少なくないでしょう。あるいは、地震や交通事故、飛行機事故などで突然に命が奪われた人なら、悔い改める機会すらありません。一生罪を犯し、永遠の痛みと後悔で苦しむ地獄に落ちるのは、なんと哀れなことでしょう。

良心がまだ残っていて罪を犯したら罪悪感を感じるうちに、創造主に立ち返り、罪を認め、主の許しを願い、滅びから救われ、天国の永遠なる命の祝福を受けるようにしませんか？　それを逃したら、終生の遺恨になります。

（三）善悪の報い

「善に報いれば悪にも報いられ、報われなければまだその時は来ない」とよく言われます。ある善悪は死後の裁きの日まで報われないですが(ローマ 2:1-6)、各人が善であれ悪であれ、おのおのの行いに従って報われます。しかし、有史以来、王侯貴族から庶民に至るまで、現世でも報われた人は数多いし、史伝やマスコミでも報道されています。しかし、その報復を行うのはどなたでしょうか。もちろん、神です。

昔、ドイツ・ベルリンのある博物館では、ある実物が展示され、牛の皮にその出来事が記録されていました。200～300 年前に、銃殺された少女の遺体が発見されました。普段少女と関わりのあるヴィルヘルムとイェリファーの 2 人の兵士が容疑者として挙げられましたが、2 人とも事件への関与を認めませんでした。当時の偉い裁判官が人に軍鼓とサイコロを用意してもらって、軍鼓の上で 2 つのサイコロを振り、サイコロの点数が多い者

が無罪となり、点数の少ない者が有罪とされるように定めました。2 つのサイコロは両方とも 6 で、合計 12 点となり、それ以上多くなれません。一方、ヴィルヘルムは、ショックでもう死ぬしかないと思っている様子でした。しかし、彼は神を信じるクリスチャンだったので、ひざまずいて大きい声を出して祈り、彼が少女を殺していないので、神が正義を下してくださるようにお願いしました。祈った後、彼はサイコロを振ったら、13 個の点が出ました。1 個は 6 点、もう 1 個は真っ二つに割れて、一つは 6 点、もう一つは 1 点となったわけです。イェリファーは、その少女がヴィルヘルムと婚約していると聞いたら妬みと憎しみが湧いたので、少女を殺したと告白しました。この事件によって、「罪には報いがあり、神は全てを支配しています」という深刻な教訓を来場者に残しました。

中国の張家村という村に、年末に町に掛取りに行った老人がロバに乗って帰っているところ、ある青年が木に首を吊って自殺しようとしているのを見かけました。なぜ首を吊るのかと尋ねたら、青年はある人に 30 元の借金があり、迫られ、死ぬことを余儀なくされたと答えました。老人は彼に同情し、借金の返済のために 30 元、さらに生計を立てる元手として 30 元を与えました。青年はお礼を言って帰りました。けれども、途中で、ふと、老人の背中にかかったバッグが重そうで中には大金が入っているに違いないと思い、貪欲になり、石を拾って老人の後頭部に投げました。老人は倒れました。青年はすぐに逃げました。しばらくしたら、老人は目を覚まし、家に帰り、3 ヵ月間療養し、回復しました。ある日、彼は再び町に出かけて、新しくできたお茶屋さんに入りました。カウンターには店主の青年がおり、よく見たら、自分に石を投げた男だと分かりました。この時、不正に扱われたことを訴えるところなくて苦しんでテーブルを叩き、空を見上げてため息をつきながら、「神もなく、報いもない」と叫びました。「この良心のない男が生きているなんて信じられません」。この時、突然、空は暗黒に包まれ、黒雲が立ち込め、雨と稲妻が降り、雷が鳴り、強い雷鳴とともに店主の青年は地に打ち付けられました。周りの皆はそれを見て驚きました。老人が立ち上がり、経緯を説明し、雷が良心をすっかり失った恩を仇で返した悪者を打ったのだと皆が分かりました。そして、神の全能と正義を称えました。

このような例は他にもたくさんあり、善を報い悪を罰し、報いを与える神が存在されることを証明できます。

## 二、人生の意味

世の人は生きているのに、生きる目的や意味を問う人は少ないし、そもそも問おうともしないでしょうか。それは確かに難しい問題です。人それぞれに人生観があり、人生観のない人もいます。ただ生きるために生きている、無目的で一日が無事に過ぎればそれでいいという態度で生きる人もいることでしょう。しかし、命は一生に一度しかなく重要で、その意味を知らないのは一生無駄になります。亡くなったら、二度と戻れないので、将来、後悔しないように、命の本当の意味を知っておかなければなりません。

聖書に、昔の聖人モーセは人生の話について一言語りました(詩篇 90:1-17)。

（一）労苦と災い（10 節）

人は泣くことから始まり、子どもは遊びしか知らないのに、よく泣くんです。現在アメリカでは、数歳の子どもが人を撃ち殺すこともあれば、殺されることもあります。人を殺す子たちは大人になったら、どのようになるか考えられません。台湾では、受験がうまくいかなかったり、進学できないことを理由に自殺する中学生がいるそうです。しかし、卒業して就職し、そのあと、結婚して家庭を持ち、子供を産めば、何の心配もなく、成功した人生を送れると思いますか？　そうでもないでしょう。仕事のプレッシャーや生計の負担が大きくなりますから。夫婦の不仲、子供の反抗、社会の不安、国の混乱、失業、経済的損失、病気、反抗、家族や友人に見放されたり、その他、いろんな出来事が考えられます。場所によっては、天災や人災に見舞われ、安心して生活できず、困窮して流浪し、家も失ってしまうこともあります。それが生きる意味でしょうか？

古今東西のあらゆる物語、小説、芝居、映画、新聞や雑誌を見たら、確かに逸話や楽しい話がありますが、それ以上に離婚や倒産、悲しみや憤りの話が多いです。それは、うまくいかないことが多いという世の中の現実を反映しています。人が笑っているのを見ると、その人はとても幸せだと思うかもしれませんが、実はそうじゃないです。昔、ある人が医者のところに行って、自分はもう生きたくないほど悲しくて悩んでいると言いました。先生は丁寧に診察したら異常はなかったと伝えました。「悩んでいるのは退屈で気を晴らすものがないからかもしれません。小説でも読んだらどうですか」と先生がアドバイスしましが、この人は納得できませんでした。先生は、続けて「劇場に行って芝居を観たらどうですか。ある劇場に、登場すると必ず笑わせてしまう有名なピエロがいると聞いたことがあります」と提案しました。それを聞いて、彼はがっかりして、先生に「私はこのピエロで、人を笑わせることはできても、自分の悲しみを解決することはできない」と言って、帰りました。世の中の表面の喜びは、見せかけや偽善に過ぎないということがよくわかります。この罪深い世の中で、労苦、悲しみ、災難や悩みをなくすことができません。(創世記 3:17-19; ヨブ記 5:7)

(二)瞬く間に時は過ぎ

人生の年月は七十年程のもので、健やかな人が八十年を数えます。たとえ一生平和で幸せで幸運に恵まれたとしても、それは永遠に続くものではありません。人は飛び立ち、一生苦労してもたった一つの棺に入って一生を終えます。昔、人がまばらだったロシアでは、遠くにあるところで土地が売られていて、千ルーブルで広い土地が手に入ると聞いて、ある農民は大喜びしました。そこで、彼は地元の持ち物をすべて売り払い、雇い人を連れてそこに行きました。肥沃な土地で、2,000 ルーブルを出せば、日の出から日没まで走り回った土地は、彼らの所有物となるというルールでした。翌日、地主と一緒に丘の上に看板を立てて、日の出とともに走り出しました。しかし、出発地から遠く離れているため、急いで戻らなければならず、日没までに終点に到着しなければ、すべてを失い、何も得ることができないのです。遅くならないように、加速して一生懸命走りました。もう暗くなりましたが、終点までまだ距離があったので、全力で走り、日が沈む頃に到着してポールを捕らえました。観客は彼を讃えましたが、彼は倒れて死んでしまったのです。雇い人たちは、その場で、幅 2 尺、長さ 6 尺しかない棺に彼を埋葬しました。

コダックのカメラ工場のオーナーは、キャリアとビジネスが盛んで、毎秒収入を得ていましたが、富と名声

を得たものの、幸福と満足を得られていませんでした。彼は、海外で心の安らぎを得たいと思い、ヨーロッパへの旅を希望しましたが、旅を終えて帰国しても退屈は消えず、絶望した彼は、ニューヨーク港に着く前に海に身を投げてしまったそうです。お金で心が満たされるわけではないことがよくわかります。アレクサンダーが欧亜大陸を征服し、バグダッドに戻ったら病で倒れ、33 歳の若さでこの世を去りました。彼は生前、自分の棺の両側を開き、何も入れない状態で両手を広げ、 町を練り歩くように大臣に頼みました。自分が空っぽの手でこの世に生まれ、今も空っぽの手でこの世を去っていること、そして、すべての栄光、富、王族、美、金、銀、富が 持っていくことができないと人に伝えるためでした。それは世の人に対する戒めで、伝道書に書いてあるように、「なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい」(伝道者の書 1 章 2 節)。

(三) 永遠の命を追い求める

たった数十年を過ごし、多くの労苦と悲しみを抱えて、あっという間になくなってしまうような人生は実は意味があるでしょうか。ある人は神に向かってそう言いました。「主よ、人のいのちの、いかに短く、すべての人の子を、いかにはかなく造られたかを、みこころにとめてください」(詩篇 89:47)。しかし、「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠の命（原文に永遠と訳されています）を思う思いを授けられた」(伝道の書 3:11) 。神が造られた人間は魂があり、その魂は死なないようにされ、永遠の命の望みを与えました。この短い人生の中で、永遠の命を見出すことができれば、それは決して無駄ではなく、意味と価値のあることです。私たちは皆、永遠に生き続けたいと願っています。昔の人は、特に帝王は人をやって不老不死の治療法を探そうとしました。また、そのために瞑想や修行をした人もいましたが、誰も成功しませんでした。人は罪を犯したので、死ななければならないからです。神だけが永遠の命を持っておられ、御心に適う者にそれをお与えになるのです。神の贈り物は人が望む不老のようなものではなく、やはり死は免れないのです。この世は邪悪で苦しいものであるのに、永遠に生きるのは何の意味があるのでしょうか。

神が与える永遠の命は、神ご自身のような命であり、永遠であるだけでなく、天使よりも非常に高く、天国で永遠に祝福されるものです。それは、なんと輝かしい、喜ばしい、祝福されることでしょう(詩篇 16:6,11)。永遠の命の長さを例にあげると、もし鳥が他の天体から地球にやってきて、千年一回のペースで砂を一粒口にくわえて去っていき、地球上のすべての砂を終えたとしても、永遠は始まっていません。永遠の命の至福を語るなら、それはこの世の言葉で表現できるものではありません。この世のすべての祝福は、永遠の命の祝福の一滴に過ぎないです。

現世の喜びのために、永遠の命の祝福を失いたいと思う人はいないでしょう。もし、永遠の命のない人がいたら、それを望まなかった自分を責めるしかないです。イエス様を信じさえすれば、すべての人が永遠の命を得られるからです。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3:16)。

# 三、罪の重大性

多くの人は罪の重大さを認識しておらず、それによって世界のいかなる災害や不幸をはるかに上回る甚大な被害や損失をもたらしています。多くの人は、なぜキリスト教で何よりも優先すべき問題のように、罪の問題がよく語られるのかを理解していません。キリスト教は神を信じているので、神と罪は共存できません。罪は神に抵抗し、神に反対し、神に従わず、神を否定し、神を世界と人の命から追い出そうとうします。そうすれ

ば、人は自由に生きて、勝手な行動をすることができます。しかし、神は宇宙人類の創造者であり、支配する範囲の主権と尊厳を維持し、いかなる破壊と混乱も許しません。だから神は必ず悪を憎み、罪を罰し、罪を滅ぼし、罪を取り除きます。このような神と人の間の罪による矛盾はイエス・キリストの十字架の死に集中しています。罪について、詳しく見てみましょう。

(一) 罪の性質

人は何が罪なのか分からず、自分には罪がないと思っているかもしれませんが、社会や他人には罪があるし、かつ、いっぱいだと思っています。これは主に、罪は利己的なものであり、人はみな自分を中心としています。神は罪を造られたのではなく、神が造られたのは自由意志を持つ者であったが、人が勝手にその自由意志を行使して、神の主権や他人の利益を侵害したとき、それが罪となるからです。一人の天使が、罪を犯してサタンに変わったように、"私が欲しい、私が欲しい、私が欲しい..."彼は天に昇り、神と平等になりたいのです(イザヤ 14:12-15)。人の始祖アダム・イブが初めて犯した罪も、自分の肉体と目の情欲を満たすためであり、知恵を持って神のようになりたいと思っていました(創 3:1-7)。だから、人の自己中心、勝手に行動するのは罪の根源です。そこから、誇り、自慢、嫉妬、欲張り、欺き、悪意、恨み、盗み、姦淫、殺人などのさまざまな罪が生まれます(マタイ 15:19;ローマ 1:26-32;ガラテヤ 5:19-31)。

本来人は自分が有罪であることを知らないはずがありません。神は人に罪を知らせるために律法を定めたので(ローマ 3:20;ヨハネ一 3:4)、人の中に良心があるので罪を知ることができます(ローマ 2:14, 15)。良心の叫びは絶えません。ある人が船が難破し、海の中で漂流して沈没するとき、「お母さん、レーズンを盗んだのは私だ」と叫び続けました。何年か前、彼が子供の時、母は貯めたレーズンが少なくなったことを発見して、彼がそれを盗んだかを尋ねましたが、彼は盗んだのではないと誓って否定しました。この時、死ぬ直前に、母を騙したことが、心の中で不安になって、だから彼が盗んだと認めました。やましいことをして、相手を見ると、顔が赤くなって頭が上がらない人がいます。だから罪を犯すのは人自身の良心にも記録されており、将来明らかにされます。

(二) 罪の誘惑

罪はよくないですが、人も罪を犯そうとしないのに、なぜ犯さなければならないのでしょうか。罪には誘惑性があり、人を誘惑し、罪に駆り立てる力があります。人が罪を犯すのは、中に罪があるからだけではなく(詩篇 51:5)、外にもサタンの働きがあります。サタンは蛇のように、人が罪の中に喜びがあって、自分を楽しめるし、ついついそれに従ってしまい、後になって間違っていると分かっても脱することができないように人を誘惑します。インドのサドゥーはある日一つの石の上に座って、以下のことを見たようです。下の一羽の小鳥がゆっくりと前にジャンプして、下に降りてみたら、大蛇に眩惑されて、前に進みました。この鳥は蛇の目に惑わされて、知らず知らずのうちに行ってしまうと、大蛇に捕らえられて飲み込まれてしまいました。この小鳥が蛇からまだ遠い時は逃げることができたはずですが、逃げなかったので、結局飲み込まれました。ある町で、ある人が前を歩いていて、豚の群れが後ろを走っていました。前の人は豆を持っていて、絶えず下に捨てていました。豚は豆を奪い合って、後を走って、すぐ屠殺場に来て、ドアを閉められ、その後、豆をもらえなくな

りました。結局、順番に殺され、人に食べられてしまいました。悪魔もよく人の好みに応じて、人にいくつかの楽しみを与えて、例えば飲み食い、女遊び、賭博などを通して人をその罠に引き込み、ドアを閉めて、人を捕まえます。

罪に巻かれたら、思い切って抜け出す決断をできる人もいます。ある人は海辺を歩いていて、足が一つの鉄の輪の中に落ちて、抜くことができなくて、だんだん海が満潮になって、行くことができなくなり、命が奪われそうなので、刀を抜いて自分の足を切断し、安全な場所に登って助けを呼びました。しかし、金を欲して命を落とす人もいて、一人の水夫は船が壊れて沈む時に、浮き輪をつけて、それから船倉に降りて、お金などを探して、見つけたものが多くて、袋を金銀財宝でいっぱいにして、自分の腰に縛って、船の表面に走って、時機を待たずに、急いで海に飛び降りて、浮き輪で逃げることができると思いましたが、海に飛び降りて、すぐ海底に沈んでしまいました。浮いていないのは、持っているお金が重すぎて、彼とお金を助ける浮き輪の浮力が足りなかったわけです。沈む時に、立って逃げずに、何かしらの利益を貪ろうとしているのがまったく愚の骨頂だと分かります。早く逃げた方がいいでしょうか。

（三）罪の結果

「罪を犯しても深刻な結果はありません」、「罪を犯してもいつも通りに生きている人が多いでしょう」と思う人がいます。しばらくはそうですが、どうしても罪の結果、死ぬという結末になります。昔から今に至るまで 2000 万の歴史には、何一つも免れたためしはありません。これはまず始祖アダムが罪を犯したからであり(創世記 2:17;ローマ 5:12-15;コリント第一 15:22)、私たち一人一人が罪を犯したからです(ローマ 6:23;エゼキエル 18:4)。人間に定まっているように、必ず死に至ります(ヘブル 9:27)。世間が罪を犯したため(ローマ 3:23)、死から逃れようとする者がいれば、それは妄想です。罪を犯していない限り、罪がない限り、死なないでいられます。そうでなければ、死は運命です。早死の人もいれば、遅死の人もいますが、思いもよらないうちに突然死んだ人もいます。だから早く準備しなければならないのです。

1950 年、ウェルズのサッカーファンは、アイルランドに行って連合王国のサッカー選手権大会を見て、結果ウェルズは六対三でアイルランドチームに勝ち、熱烈に祝った後、専用機で帰国しましたが、意外にも滑走路から百五十ヤードのところで落ちて、78 人はすべて生還しませんでした。ファンの死体と歓迎の旗、犠牲者の血と乗客の涙。極楽が地獄に変わるのは一瞬で、死は容赦がありません。

人は皆死にたくないですが、死の観念は常に人の心を巡っており、罪のために、人が自殺して死んだことがあります。日本では東京から電車で西へ 2 時間ほどのところに熱海という小さな駅があり、温泉と遊園地で有名です。近くに錦浦という海岸があり、太平洋に面して、崖が急で、密林が静かで、非常に魅力的で、毎年数百人が各地から来て、海に身を投げて、ある人が人生の最後の駅と名付けました。多くの人は人生の味気なさを感じ、人間の辛酸を飲み込み、罪の中の喜びを感じなくなり、一生の罪の借金を終わらせるためにここまで来て命を終えます。これは愚魯ですが、罪深い人生の当然の結末です。普通の人はここに来たくないですが、どうしても死という「人生最後」の旅に向けて進んでいるのではありませんか。何十年と生きることができますが、死は自分のものではないと抵抗しても功がありません。罪は解決せず、死は永遠に存在します。死はすべての人の最後で、生きている人も必ずこのことを心に置いてください。誰も生命を管理する権利がないし、死期を管理する権利がないのです。この戦いは誰も免れることができません(伝道書 7:2;8:8)。ただ一人が、人を死を免れるように罪から救えます。それが人のために世に降りてきたイエス・キリストです。

# 四、人は死後どこに行くのですか？

「人の死は灯の如く消え」とよく聞きます。死んだら何もかも終わりで、全てがなくなるのに、どうして死後のことを聞く必要があるのでしょうか？　しかし、昔から今に至るまで、世の中のさまざまな人の圧倒的多数は、人が死んだ後も何らかの形で存在し、つまり来世の観念があると信じています。人の死は世界にとって過去のものであり、二度と関係を持つことはなく、やがて完全に忘れられます。名を残されても、本人も知らないです。しかし、人は死んで終わりではなく、その問題はあまりにも深刻で、死んだ世界は永遠で、今生きている日よりも長いので、もっと真剣に考えるべきです。少なくとも知っておかなければならないことがいくつかあり、以下のようです。

## (一) 魂の存在

人が他の動物と違うのは、人に魂があるからです。しかし、魂は死によって消滅するのではなく、肉体が死んだ時に肉体を離れるだけで、肉体に戻って再び生き返ることもあります(列王記一 17:20-21;ルカ 8:55;使徒 20:10:ヤコブ 2:26)。それは古い言い方ではなく、現代人は魂の存在を信じている人も多いです。アメリカのある医者は「死の門の向こうには」という本を書き、本には彼が多くの病人の死んだ後に生き返った例を述べ、彼らは死んだと宣言された後、体を離れたが、また帰ってきて彼らの死んだ後の情況、救助されても効果がないのも見たようです。大半の人は、一つの暗い道を通って、門に着いたが、大多数は押し込まれて、少数だけが送り返されて、まだ自分の体に入って、また生きて来たと言われたそうです。ドアの向こうは炎が燃えていて、恐ろしいようです。「読者文摘」という雑誌に次の記事が載ったことがあります。ある病院で、ある患者が手術後、手術室内で起こったことを話し、自分が天井の上に行って、自分の受けている手術を上から見ていたそうです。看護師は信じなくて執刀医を呼んできて、話を聞いたら、その患者さんの言ったのが正しいと分かりました。それを裏付けるように、手術時に執刀医が周りの看護士に器具を要求し、それを取りに行ってもらったことを見たと例を挙げ、医師はそれが確かにあったと言い、手術室の全ての看護士を呼んでき、器具を取りに行った看護士を見分けてもらい、それも合っていたようです。彼は手術の時に麻酔をかけられ、目を覆われたので、見えたり、知覚があったりできないはずですが、それは彼の魂が殻を出たとしか解釈できません。

また、魂の存在に対する古今東西の実例は多くあります。このことを専門的に論じている書籍も多く、魂が現在も死後もあることは疑いようがないです。人の魂は死んだらどこに行きますか？　これは知らないわけにはいかない問題です。あなた自身の本当の永遠の将来に関係があります。神の定めに従って、人が逃れることができないのは「誰もが一度は死に、死後は裁きがある」(ヘブル 9:27)。死は終わりではなく、神の審判に臨まなければなりません。まず死ぬ時に、あなたがどこへ行くのかを決めなければなりません。終末にはもっと大きな審判があり、最後、人の行く場所を決めます。普通の人も天国と地獄があることを知っています。聖書

にはもっと詳しく書かれています。

(二) 地獄はどこ

人は死んだら陰府に行きます(創 37:35;民 16:30;詩 55:15)。中の一か所は地獄で、苦しむ場所です(ルカ 16:23;マタイ 18:9)。地獄があることを信じない悪人一人が、ある牧師に出くわし、「地獄はどこにあるのか」と聞いたら、「すぐ目の前にあるかもしれません」と牧師が答えました。その人が去ったとたん、彼の乗っていた馬が突然驚かされ、彼は地面に落ちて死んでしまいました。その後、彼が生き返りました。その間に彼が地獄に落ち、そこで見たのは骨折、火に燃やされ、刀で切れらることより何よりも苦しい風景ですと言いました。すぐに悔い改めて、再び罪を犯さず、本当に地獄に落ちたら、耐えられない苦痛があるのを恐れました。地獄は地の深きにあるので、地獄に降りるとよく言います(詩篇 63:9,ペテロ第二 2:4)。

イギリスに人間地獄の例もあります。西部にある金持ちは、奇病を起こして、記憶を失い、神経が乱れ、妻子もわからなくなり、こんな状況は約 7 年続きました。ある日、部屋中に座っていた時、突然飛び起きて、「私は出て来たよ」と言い、妻と子供を見て喜び、また泣き続け、その経過を聞くと、 「ここ数年、私は地獄の中にいて、至る所に火があり、焼かれて逃げたくても逃げ場がなく、苦痛の極みで、神から離れたのを悔い改め、逃げようとしたが道がなく、最後に一つの火山に登って、山頂に着いて、一つの所に光があるように見え、下に向かって飛び降り、ここにたどり着いた。家の中で、またあなた方を見ることができ、地獄から救われ、本当に神の大恩に感謝し、罪を犯して墜落しないように決心した」と言ったそうです。地獄に落ちても脱出するチャンスがあると言いたいわけではなありません。この人はまだ生きている間に、この経験があったので、悔い改めを悟ることができたし、他の人に罪を犯し、地獄に落ちて苦しまないように警告できると言いたいのです。友よ、地獄に落ちるのは決して冗談ではありません。一度入ったら、死にたくても死ねないし、生きる希望もないし、泣き叫んでも出れません。やはり今地獄に入らないうちに、悔い改めてイエスを信じてください。イエスはあなたを赦すことができます。あなたの罪が多くても、すでにあなたのために血を流し、救いの御業をなさいました。イエスをあなたの救い主とし、イエスの名を告げることを求めれば、必ず救われます(ローマ 10:9, 13)。イエスが言われた陰府で炎の中で苦しんでいてラザロに頼んで指先に水をつけて舌を冷やさせるのもできない金持ちから教訓を学びましょう。その時は遅すぎて救いようがないです。

（三）天国に行ける

一般の人は「善人は天国に行き、悪人は地獄に行く」と言います。あなたは善人か悪人か、天国に行けるか、地獄に落ちるか、考えたことがありますか？　上で述べたように、「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もいない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった善を行う者はいない。ただの一人もいない。...彼らの目には神への畏れはない」(ローマ 3:10-18)。一方で私たちはみんな罪人で、罪を犯しました(ローマ 5:19;3:9,23)。だから、人は自分だけでは救われず、罪人を救おうとしたイエスに頼るしかないです(テモテ一 1:15;2:4-6;使徒行伝 4:12)。私たちを神の前へ導くように十字架にかけられ、不義の私たち

の代わりに義なる彼はその身にわたしたちの罪を担ってくださいました(ペテロ一 2:24;3:18)。だから、神の遣わされた独り子イエスを信じれば、滅びずに永遠の命を得ることができるます(ヨハネ 3:16-18)。

主イエスの福音を信じない罪を負った者は、永遠の破滅を受けます(テサロニケ二 1:8, 9)。終末の大審判の時、その名が命の書に記されていない者、あるいはおくびょうな者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、みだらな行いをする者、魔術を使う者、偶像を拝む者、すべてうそを言う者、このような者たちに対する報いは、火と硫黄の燃える池であり、それが、第二の死である(黙示録 20:15;21:8)。人を憎んだり、淫らな思いをしたり、嘘をついたり、貪ったりしたことがありませんか？　それにより火の燃える池に行かされます。地獄よりも怖くて、永遠の破滅になります(ヨハネ一 3:16;マタイ 5:28)。

天国とはどんな所かというと、神のいる所であり、主を信じる者は、死後、主と共に在ることができ(フィリピ 1:23)、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まりなどと新しい契約の仲介者イエス(ヘブル 12:22-24)。イエスはご自分に属する者を迎え、用意した所へ連れて行かれます(ヨハネ 14：2, 3 )。聖なる都、新エルサレムが私たちの最後の永遠なる天の家です。その場所は栄光、喜び、美に満ち、真珠門、精金街、宝石の基礎だけでなく、お城自身は碧玉と宝石で造られたので、神の栄光に満ちています。お城の中には神と子羊の玉座があり、また命の川と命の木があり、もう呪われて死ぬことはありません。あなたは行きたいですか？　そのためには、子羊、イエス・キリストの命の本に名前をつけ、子羊の血で自分の服を洗わなければなりません(ルカ 21:9-27:22:14)。主が近づいてきました。あなたもいつこの世を去るかわからないですので、死後、地獄に落ちずに天国に行けるように急いで準備しなければならないでしょう。

# 五、信仰はどんな宗教でも同じですか？

宗教の目的は人に善を勧めることにほかならないと言って、どの宗教を信じても同じ道に帰ると言っている人がいますが、この話は正しいですか。この説から影響を受けた人は多いですが、人の魂の救いに極めて邪魔になります。見分けないといけません。この話は複雑で、人は簡単に受け入れられないかもしれませんが、そう思っている人にもっと考え、謙虚に研究していただきたいです。ここでいくつかの関連の問題について検討したいと思います。

## (一) 宗教起源

宗教とは、人類の初期にある自然界の現象、例えば暴風、暴雨、地震、雷などの自然界の現象を恐れ、遭難を避け、保護されるようにこのような不思議な力を崇拝することから始めたと思っている人がいます。人間の宗教観念は生まれつきのものであり、人間には心と魂があり、物質的に満足できるものではない、この「宗教的飢餓感」は、人々に宗教に助けを求めざるを得なくさせ、最高の理想、欲望を得て、魂を満足させると考える人もいます。現実に不満を持ち、未来に憧れがある人には宗教からこそ活路を見出せます。また、災難を避けて福を得ようとしたり、報いを恐れ、人生の結末を探し、光明の彼岸に至るように宗教で答えを見つけたい

人もいます。伝え聞いた話では、奇妙なことがあり、鬼神がいると思って崇拝したりするのは迷信にすぎず、宗教とは言えません。また、人々はさまざまな宇宙観や人生観を持っていますが、唯物論や無神論は哲学理論にすぎず、宗教的な意味はないです。また、道徳や政治などの面において様々な主義、観点や組織、活動が生まれ、それは宗教ではなありません。

もちろん科学を尊び、人間本位を唱え、あらゆる宗教に反対する人もいます。例えば、進化論者の反キリスト教的な創世論、一切の超然なる力、神や霊界の存在に反対する理論。これに反論する専門書が多くあり、宗教に対する正しい観念を確立するのに役立ちました。ここでは詳しく述べません。しかし、現在、全世界の人口は約 60 億人で、大多数の人は宗教信仰を持っており、世界人口の割合を多く占める国、例えば中国人、インド人、アメリカ人、ロシア人及び日本人、インドネシア人、ブラジル人などは全国民の半分以上が宗教を信じている、つまり有神論者です。ロシアと中国も例外ではなく、本当の無神論者或いは無宗教者は非常に少数です。宗教を持つかどうかではなく、どの信仰を持つか、どの宗教を信じるかの問題です。

(二) 各種宗教

世界には宗教がたくさんありますが、すべては真実で、信頼できますか？　唯一真実で信頼できるものがあれば、他は人の思想の産物で、人自身の発明であり、客観的な事実に合わないところがあり、変わらない真理ではなく、神が認めた教義ではないのでしょうか。利益も得られず、将来に役立たず、幻想や仮定、迷信に基づいているものもあるのでしょうか。宇宙の真の意味、万有の真の神とは関係がありますでしょうか。宗教を開いた者も皆いつか死ぬ罪人です。中には道徳、正義がなく、非常に利己的な人はいます。そのような人たちは人を救え、導くことができるのでしょうか。慈悲深い、親切な心と説を持っている教主、道教、魔術師がいますが、彼らは真の神に遣わされ、立てた救い主ではないので、真の救い方もなく、罪、地獄、永遠の命、天国も知らず、救いの問題を解決することはできません。奇跡を起こすことができる教門、道派、秘宗がありますが、効果てきめんに見えますが、結局粗末で人前に持ち出せません。ただ知識のない人を騙し、時間の試練に耐えられなく、さらに全世界に普及できなく、信者が多くいても、経典がなくて、頼れるわけではありません。歴史で調べても、実際の証拠がありません。それらのいわゆる奇跡、奇事、霊験は別のルートがあり、決して信用してはならないのです。聖書はこれに対して既に警告を出しました(申命記 13:1;マタイ 24:24;テサロニケ二 2:9;黙示録 13:13)。騙され、熱中になり、従って信じてはいけません。帰依者はいても、多くは利己的で、人の話の受け売りをするだけで、流行りにつきますが、やがて諦め、何も残りません。すべてが空っぽで、何も解決になりません。

仏、道、回、インドなどの大きい宗教があり、人数は少なくないですが、その出所、歴史、発展、教義、法典、信者、影響などから経緯、因果効果を考察し、研究すれば、その中には間違いと矛盾があり、実証できないところもあると分かります。専門的に宗教の比較を研究し、異端を論駁し、真理を守る本、学術会、検討会

などは多くあり、ここで詳しく解釈しません。真心で真理を求め、各宗教の由来を探し出す方に、先入観を持たず、客観的な態度で深く探求し、しかも真神の教えを求めていただきたいです。そうすれば、必ず正しい返事を得ることができると信じます。

（三）正信

キリスト教はあまりにも独断的で自画自賛し、他の宗教を軽視し、攻撃し、独善的で、唯我独尊であるというような批判の声が聞こえますが、それが確かに真理です。2000 年来の試練を経て、たくさんの迫害を経て、いろんな学術攻撃を受け、社会伝統の極端な反対があっても、依然として立っています。信者数は数十人の無学な小民から、今日の 16、7 億人に発展し、全世界人口の 1/3 近くを占めています。古代ユダヤの小邦から、地球の隅々まで伝わり、大国の民も征服され、多くが入信し、神にひれ伏しました。イエス・キリストの前にひれ伏した王、指導者、英雄、名士が多くいます。統計によると、300 年近くの 300 人の偉大な科学者の中に、90%の人はイエスを信じているようです。ダーウィンも晩年に愚鈍を自認し、提唱した進化論が蔓延した野火のように影響が広まったので、悔しがっていたようです。

キリスト教は社会の人々にどのような影響を与えましたか？　実りによって木を認められます。近代西洋文明、良い面はすべてキリスト教から来たと言えます。例えば、博愛、自由、平等、奴隷制度の解放、科学発展の提唱(中世のカトリック教会は科学者を圧迫しましたが、宗教改革後のキリスト教は完全に変りました)、人権と民主の主張、罪悪と不法への抵抗などです。これらの世界の道徳、風潮、人心に対する影響は深遠であり、現在欧米の堕落は、まさにもとのキリスト教の信仰から離れたことによるもので、聖書を学校教育と社交の範囲外に排斥した必然的な結果です。

キリスト教の正確で信用できるのは、根拠となる聖書だけじゃなく、多くのクリスチャンは生きている証です。もちろん、一部の人は信仰不純で、新たに生まれていないし、ヒエのように教内にいて、悪いことをよくします。聖書はこれに対して既に予言し、彼らは将来厳しく処罰されます(マタイ 13:40,41,49,50 )。しかし、真のクリスチャンは、この罪深い、腐敗した世の中で星の光に輝き、命の言葉を保つ、救い主を知り、受け入れるように人を導きます(マタイ 5:13,14, 16;フィリピ 2:14-16;ペテロ 2:9, 12)。

今日、クリスチャンは主の命令に従って、世界に行って福音を伝え、すべての民を主の弟子にし、彼らにバプテスマを授け、主の命令をすべて守るように教え、 彼らが伝えた福音を証明する奇跡もあり、それは大きな証です(マタイ 28:18-20;マルコ 16:15,16,20) 。もし人が信じなかったり、勝手に人を拝む宗教を選んだり、真の神、救い主と彼の奇妙で真実な福音を捨てたら、神に捨てられ、痛切に悔むしかないでしょう。

# 六、なぜイエス信じるのですか？

他の宗教、迷信、偽神、偶像はもちろん信じられません。信じたら無益で、逆に有害で、真の道を信じるのに邪魔し、真の神に怒られます。しかし、もし本当の神を信じるならば十分ではありませんか？　なぜイエスを信じなければならないのですか。イエスは誰ですか、信頼できますか。イエスを信じることに何のメリットがありますか？　これらの問題は聖書と多くの信者、そして無数の説教著作から答えを得ます。ここでは、重要なポイントをいくつか述べさせていただきます。

(一) 人のために有罪

罪がなければ、イエスを信じなくてもいいです。 救い主を必要とせず、救いの方法を必要としないので。しかし、あなたが罪を犯したことがあれば、話は全く違います。世界の人類を管理する大きい支配者がいて、天におられる神は神聖で、正義の審判者であり、有罪を無罪とせず、必ずすべての犯罪を公正に処理しなければならず、世界のすべての国、政府、法律、裁判官より実行する正義な判決は真剣で、厳格です。ある日、全世界のすべての生きている人、死んだ人は神の裁きを受けなければならず、誰も逃れることができず、避けることができません。そうすれば、あなたは自分の罪を引き受けて、結果は前言ったように、滅びます。神は罪人が罪をもってご自分の創造、支配、管理された国の中で生きるのを許せません(ヘブル 9:27:使徒 17:3;黙示録 20:11-15)。

しかし、神は世の人々を愛していて、一人も滅びないで皆が悔い改めることを願っています。人が悔い改め、イエスを信じ、救われますように願っています(ペテロ二 3:9;テモテ一 2:4)。なぜイエスが罪を赦し、救われると信じないといけませんか。それは罪を赦す権利がある人がなく、罪を定めたり赦したりできるのは神しかないからです。しかし、神は正義で、信実であり、有罪を無罪とすることはできず、罪に対する刑罰も行わなければならないです。そのため、ご自分の子キリストをこの世に遣わされました。イエスは人の罪を担うために十字架にかけられ、血を流し、命を捨てられました。神は私たちの罪をイエスに返したので、彼は処刑されました。私たちも処刑されたと同じように、私たちは罪で罰されず、罪の刑から解放されました。罪のない義人になりました。(イザヤ 53:4-6;ローマ 3:24;コリント二 5:21)

だから、イエスを信じないで、彼の罪を償う救いを受けなければ、救われず、滅んでしまい、地獄に落ちるしかないのです。しかし、人々はこれに対して疑いがあり、この簡単な救い方を信じたがりません。それ以外にも、たくさん質問し、信用できない、合理ではない、憐みが足りないなど、さまざまな批判をしています。人は自分を主とし、中心とし、出発点として、神を批判や軽視し、人が塵のように小さく、卑しい人にすぎないこと、神と平等で、神と論議することができないことを忘れたわけです。あなたが神を信じない限り、神の定めた戒めのように行動するしかないです。あなたが尊敬しても尊敬しなくても、好きでも好きじゃなくても、どんなに多くの質問があってもへりくだらないといけません。この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかったで、それは、神の知恵にかなっていて、そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのです(コリント一 1:21)。

(二) 信じることによって救われる

人は信じないことを選べ、誰も無理にあなたに信じさせないです。しかし、信じない人は滅び、永遠の福を得られません。これは人の選択によるもので、将来天国と永遠の命を失い、かえって地獄に落ち、神が助けてくれないのを責められません。また、すでに神は独り子イエスをあなたのために捨てられましたが、あなたがそれを受け入れないのは自分の責任でしょう。しかし、イエス・キリストを信じ、受け入れた人は、神の子としての権利を与えられました(ヨハネ 1:12)。天上で霊のもろもろの祝福を得ることができます(エペソ 1:3)。それはこの世のすべての金では替えられないです。またとないチャンスなのに、失くす人がいます。ただ心の中に少しの誇りとかたくなな思いがあって、へりくだってイエスの恵みあふれる福音を信じようとしないのは、後悔することしかないです。信じない人は自分が愚かで頑固で、その上に、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのです(コリント二 4:4)。彼らに悔い改めの心を与えて、真理を知らせ、一度は悪魔に捕えられてその欲するままになっていても、目ざめて彼のわなからのがれさせて下さるように神に祈っています(テモテ二 2:25~26)。けれども、悔い改めは遅れてもいけません。恐らく悔い改める機会さえなくなります。

チベットに伝道に行った撒都が、他の人と一緒にヒマラヤの山を旅行した時、ある少年は喉が渇いて、一つの湿地の真ん中に水があることを発見して、飲みに行こうとしたら、彼の兄は彼を止めて、そこに行く人はすべて泥の中に落ち、誰も帰って来ることができないと言いました。皆も止めようとしましたが、彼は聞かなかったし、どうしても行きたくて、水際まで行くと、泥は足の脛までしか来なかったですが、彼が水を飲みに行って帰ってくる時、泥の中に沈み始めて膝まで来て、少し動くと腰まで落ちて、後は首まで落ちて、頭まで沈んでいくところ、誰も彼を救うことができませんでした。行く人は同じ危険にさらされたので。早く悔い改めてください。罪にふけってはいけません。あなたが疑っている問題に首を突っ込まないでください。今が最後のチャンスです。イエスはまだあなたに手を伸ばしています(使徒行伝 4:12)。

(三) 主は信頼できます

主イエスを信じることは決して迷信ではなく、決して騙され損になることはなく、人は頼りにならないですが、神は絶対に信頼できるし、神のような偉大で、善良で、信頼できる神は、決して嘘をついて人を騙すことはありません。仮に人が 2000 年以来で、イエスの名で伝えた福音、イエスのために作った証はすべて偽りと嘘で、神は禁止しなかったなら、神としての尊厳、人を裁くや世界を管理する権威はどこにありますか。また、ご自分の真理を宣言し、御胸を示し、真実の福音を人に聞かせることができますでしょうか。聖書は、御言葉を自称していますが、嘘に満ちるなら、必ず神に滅ぼされます。その場合、聖書の偽りの教えに従う者を取り除き、伝道士が自分の説教を聞いた人に謝るべきです。すべての教会は閉じられ、キリスト教の名前は世界から抹消されなければなりません。

しかし、主イエスは非常に信頼できるお方で、キリスト教は世界に大きな貢献をしました。神がキリストの中で人のために用意されたその極めて豊かな救いと永遠の栄光を人が得るように、キリスト教は永遠の命の道

を示し、人を神の前に導いています。イエスの名は信頼できます。私たちは彼の名によって祈り、よく答えられます。イギリスにある孤児院のオーナー、モラーさんの話では、九十何年の人生に、5 万回以上の祈りが神に答えられたようです。実際にはすべての真のクリスチャンも主の御名によって捧げた祈りが答えられた証が多くあります。主の御名によって伝道し、何千万人を悔い改めさせ、主に導いた証もあります。主イエスの御名によって鬼を追い出したり、病を癒したりするのは 20 世紀の今で見られないわけではありません。アジア、アフリカだけでなく、アメリカにもあります。テレビで見たら、何万人の前に現れたことがあります。私たちは奇跡で信じたわけではありません。最も確実なのは、聖書と主の言葉で、それに反論、弁解する余地がありません。例えば、主イエスは復活された後、「あなたたちがすべての国民を弟子として行ってください」と弟子たちに命じました。それは私たちの目の前に実現しました。主イエスは「地のはてまで証をしてください」と言いました(使徒行伝 1:6-7)。イスラエルが国を取り戻したのは、1948 年に成就されたではありませんか。イエスを信じる最大の根拠は聖書であり、次に述べさせていただきます。

# 七、聖書は真実で信頼できますか

キリスト教の信仰は完全に聖書に基づいており、もし聖書が信頼できなければ、キリスト教は根拠がなく、書かれたことは必ずしも真理ではなく、イエスを信じても確信がなくなります。この問題はあまりにも深刻で、歴代多くの人の多方面での繰り返した研究と実験を通して、聖書はすべて神が黙示したものであり(テモテ二 3:16)、完全に神から人への言葉で、いかなる誤りも欠けもないと分かります。数千年の人類の歴史と何千万人の信者の経験で証明することができます。一般的に認められる聖書の信憑性について十の証明が以下のようです。

(一) 全書合一

聖書は 66 巻あり、40 人余りの作者が 1500 年にわたって書いた(B.C.1450-A.D.90)ものを一冊の本にして、前後に一貫しています。テーマも一致していて、内容も矛盾がないので、統一で指導と管理の役割を果たしている編集長と本当の作者が背後にいることを証明しました。その方はもちろん神ご自身です。

(二) 道徳的に俗を超えている

一般の本に、道徳を問わないものやレベルが低いものがあり、道徳の話をしていても一般基準ですが、聖書だけは、神の観点で非常に高い基準を持っていて、この世の理想をはるかに超え、決して人が書けたものではありません。

(三) 教義が完璧

聖書は神の全知、全能、全在、聖潔、慈愛、公義、人の原状、墜落と現状、そして将来の結末を言い、中に、キリストの降誕、救い、復活、昇天、そして福音の素晴らしさ、救いの完璧さ、永遠の命への望みと行為規準などについて特に述べました。これは人の造った宗教が複製できるものではありません。

(四) 影響が大きい

世界に聖書よりもっと大きい影響がある本がありません。何億人の人生を変えた本で人に新しい命、力、知恵、慰め、希望を与え、同時に人類全体の文化、思想、社会関係などの各方面で計り知れない影響を与えました。ある白人がアフリカで商売をしていて、ある黒人が聖書を読んでいるのを見て、「この本は私の国では昔ほど尊敬されていないし、読む人が少ないです」と言いました。この黒人は聖書と自分の腹を指して「この本のためでなければ、君はすでに私の腹に入っている」と答えました。聖書の感化力によって、食人族が文明の国となりました。

（五) 不思議を保存する

聖書は数千年の歴史があり、新約聖書は 2000 年前、旧約聖書は 5500 年前に書き上げたようです。様々な拷問、破壊、反対、権力も破壊しようとしたが、依然として存在し、しかも影響力が大きいです。現存しているまれな他の古書の中には生気の足りない、内容が不完全、矛盾があり、真偽が分からないものが多いです。

フランスの無神論者ワルテルは、100 年後に聖書は忘れられた本になり、古物陳列館でしか見つけられないだろうと発言しましたが、しかし、100 年後、彼の家はジュネーブ聖書会に聖書を印刷する所として購入されました。

(六) 広く伝わる

聖書は一か所で保存されるのではなく、各国、各民族、各町、各人、世界の隅々までに伝わりました。毎年、出版、販売、読書の量が世界一で、古今のどの本も及びません。すでに 1900 種類以上の文字に翻訳され、辺境の荒野、原野の民族、部族地域まで届きました。

(七) 予言が成就される

聖書は神が啓示された話です。この世に予言の本はありませんし、成就までさらに言えません。神だけが未来のことを知っているので、聖書は予言がいっぱいで、書かれた時は約 1/4 が予言でした。一部は成就されましたが、一部は今成就されています。イスラエルと世界各国についての預言、終末の状況、主イエスの再臨の予兆などはすでに成就されました。今成就されたのもあり、近い将来に成就されるものもあるでしょう。人は未来のことを決して知ることができないので、聖書の予言は神が絶対に信頼できるのを証明しました。特に、イスラエル人の帰還、復興、建国、そして中東の情勢や戦争などは世の人の目の前にあり、聖書の生きている証になっています。

(八) 科学証明

近代と現代の多くの科学的な発見と発明は聖書の信憑性に有力な証明をしました。聖書は間違いがなく、 1

００％正しいです。現代の天文学、地質学、生物学、考古学などは創世記の第一章を証明しています。

ヨシュアの長い日の話を見ましょう。一人のイギリスの天文学者は天体の運行を考察し、地球が規則通りに運行すれば、太陽系の循環の中で、一日ぐらい少ないと分かり、またアメリカのエール大学の教授に依頼し、調査してもらい、同様の結果を得ました。聖書によると、ヨシュアは祈りを捧げて月日の停止を求めました。それは約 1 日の間、精密な検査で 23 時間 40 分だそうです。残りの 20 分は聖書を調べたら、ヒゼキヤが祈りを捧げ、日時計が十度下がるように求め、それがちょうど 40 分の数に合うと分かります。この千古の奇聞は聖書を読んだらクリアになるでしょう(ヨシュア 10:12-14;イザヤ 38:7,8)。これは聖書の完全なる信頼性を証明し、科学者は頭を下げ、「主よ、私は信じます」と祈ることしかできません。

(九) アークの発見

聖書に記されたノアの箱舟は巨大で、世界のあらゆる動物を収容し、信じられないと昔の人が思いましたが、最近、探検家や飛行機、人工衛星の調査によって箱舟が存在していると分かりました。この箱舟は今、トルコとロシアとイランとの国境に近いアララト山にとどまり、聖書の言ったとおりです(創世記 6:13-22;8:4)。新聞に報道され、証拠として写真も添えられています。約十数個のサッカー場ほどの大きさで、当時陸上にいたすべての動物のオスとメスを収容できるそうです。魚類は含まれておらず、1 年間食糧を備蓄することもできるそうです。これは聖書への強力な証明であり、聖書の話は嘘や間違いがありません。

(十)主の証

イエス・キリストが生まれる前に、旧約聖書には 150 余カ所で、イエスがどう生まれたか、生まれた時期と場所が説かれています。イエスのために道を開く先鋒の話や、イエスは聖霊にのぞまれ、出て来て福音を伝え、奇跡を起こし、人のために病気を癒し、人間の苦しみも受けていました。その後、ロバに乗ってエルサレムに入り、聖殿を清め、人に売られ、裁かれても何も言わず、鞭打たれ、嘲笑され、罵られました。最後に十字架にかけら、犯罪者として処刑され、また犯罪者のために祈りました(詩篇 22:14-18;イザヤ 53:3-12)。イエスの骨は一本も折れなくて、撃たれたら、脇腹から血と水が流れ出ました。最後に、「私の神、私の神、なぜ私を見捨てたのか」と叫びながら、ご自分の魂を父の手にゆだねました。金持ちの墓に葬られたけれど、三日目に死からよみがえり、高天に昇り、神の右に座り、このすべては旧約聖書の預言の通りに成就されました。このことは新約の福音書に詳しく記されています。当時の弟子たちがイエスが神の用意されたメシアだと信じただけでなく、その後、数え切れないほどのクリスチャンも信じました。聖書が神からの御言葉だと信じる人は幸いです。

ルカによる福音書に記された天使が羊飼いに語った話は、イエスが世の救い主であると信じることを人に呼びかけるのに十分です。「すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである」(ルカ 2:10,11)という言葉が私たちの目にも耳にも届いています。イエスの誕生は確かに万民に関係があります。イエスの生まれた年は、全世界の人の紀元となり、イエスの生まれた日は、全世界が熱烈に喜び、十字架は救いの印であると知られ、復活された日、つまり今の日曜日は、全世界の人がイエスを記念するお休みの日になり、それは全ての民に大き

な喜びになるでしょう。早くイエスを信じましょう！　イエスは信頼できます！　ハレルヤ！　アーメン！

# 第二篇:初信編

## 一、まず、あなたは救われましたか？

救われることが大事です。例えば、船が壊れて人が海に落ちてしまった場合、誰かが自分を水没から救い出してくれることを一番望むでしょう。人が住んでいるビルが火事になって閉じ込められた場合、焼死の危険から何とか救い出されることを願うでしょう。刑務所で死刑に判決されたので、恩赦を受けて釈放されるように期待するでしょう。体が救われ、死なないことは大事なことですが、魂が滅びず、救われることはもっと大きなことで、永遠の生死、存亡、禍福に関する極大なことです。それは私たちがイエスを信じる最も基本的な目的です。私たちの人生で最初に解決すべき問題として挙げなければならないです。人は今の数十年の幸福のために、ごくわずかな利益のために、集中し、計画を立て、努力をしていますが、永遠に救われるか滅びるかの問題に対して、無関心で、大変愚かで、可哀そうじゃないでしょうか。

ここで、救いに関するいくつかの問題を見てみましょう。

### (一) 救われる意味

一般に、救われるとは、大きな災難に遭い、命の危険がありますが、不幸や苦難から救われることを言います。しかし、人の目の前にあるのは、身体の不幸、災難、苦痛、死だけではなく、魂が沈み、滅び、地獄と火の湖の危険もあります。神はこれを非常に重視しておられますが、ご神聖で公儀の本性と国を治める法規によれば、罪を犯したら死ぬことになりますが、しかし、ご慈愛と憐れみのために、神は皆が救われることを望み、一人も沈むことを望んでいないです(テモテ一 2:4;ペテロ二 3:9)。ですから、神はすべての罪人を救うために、救法を立て、救いを実行しました。それは独り子のイエス・キリストを遣されたのです。イエスは人の形になり、世の救い主として、人が永遠に沈み、滅びないように、ご自分の体を通して、人の罪を十字架につけられ、人に代わって刑を受け、そして人の罪を赦しました。

一方、神はより豊かな恵みがあり、それは人に永遠の命、神の子供の身分も与えられました。それは大きな権力と祝福です。これはすべて人が神の子をもてなし、イエス・キリストの名を信じて得たものです(ヨハネ 3:16;1:12)。すべては主イエスが私たちのために用意してくださったものです。だから、「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。」(エペソ 2:8,9)。この救いの恵みはあまりにも大きく、イエスが命を捨てて血を流して私たちのために取り替えてくださったのですから、救いの福音といいます。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえられましたこと(コリント一 15:2-

4)。自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われます(ローマ 10:9)。この人以外による救いはない。わたしたちを救う御名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝 4:12)。あなたは他の宗教を信じても、いわゆる教祖、道、方法で救われません。それらはすべて神が与えたものではなく、神が認めないものだからです。将来の天国の門は、あなたがイエスを信じ、彼の名の下になるからこそ、入ることができます。

(二) 救われる道

救われるのは難しいと思っている人がいますが、世の中には完璧な人がいません。イエスを信じるだけで救われるなんて、簡単すぎると思う人もいますが、なぜイエスだけ信じることで救われるのかという疑問もあります。ある日、リバプールに大火があって、ビルは下から燃え上がり、階段も燃えてしまい、一番上の階で、たくさんの人が窓から頭を出して助けてと叫びましたが、消防隊の梯子は少し短くて、突然一人が梯子に登って、二足で梯子の頂を踏んで、両手で窓の敷居をつかんで、「あなたたちは速く私の体を通して登って行って」と叫びました。上の階の人は彼の体を通して登って、皆は助かりましたが、彼は焼けて重傷を負いました。同じく、人が天国に着く梯子が短すぎて、イエスの犠牲しか通して救われることができません。彼は天から降り、また天に戻り、天と地をつなぐ梯子であることを示しています(ヨハネ 1:51)。

人の側から言えば、人は救いを求める願望と決意があれば、主イエスが彼を救わないはずがないのです。ある大きな船が遭難した時、当時の人は皆逃げようとしましたが、救命ボートが少なくて、大きな船が沈みそうになった時、ある人が大きな船から海に飛び降りて救命ボートに向かって泳ぎましたが、救命ボートはすでに人がいっぱいで、もう一人を受け入れることができなく、彼を断りましたが、彼は右手を伸ばしてボートの縁をつかんで、上に登ろうとしたが、ボートが全滅しないように、 ボートの人はナイフで彼の指を切り落として、彼は痛みを顧みず、また左手を伸ばして救命ボートをつかみましたが、ボートの水夫はまた彼の左手の指を全部切り落として、この人は両手が指がなくて、そのボートをつかむことができなくなり、全力でボートの縁まで泳いで、離さないように歯で噛みました。これで、ボートの人は彼の頭を切りたくなくて、彼をボートに引っ張ってきて、それで、彼は救われました。ボートのは冷たくて、思いやりがないですが、この人の救いを求める心がすごく切実であるため、これ以上拒否することができなくなりました。まして、イエスは天から滅びゆく人を救うために降臨されたのだから、見殺しにすることはできないでしょう。アークの箱舟と同じく、イエスの救命ボートはすべての人を受け入れることができます。もしあなたが心から救いを求めれば、あなたは救われ、滅びを免れます。

主の召しは、いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるのがよいです(イザヤ 55:1;黙示録 22:17)。しかし、神の招きを拒み、天の恵みを失った人はいくらいますか(マタイ 22:1-5;ルカ 14:15-24)。だから、救われるのは難しくないです。神はすべてをすでに用意されたので、あなたがイエスを信じ、あなたの救い主として受け入れれば十分です。

(三) 救いの堅実さ

どうやって自分が救われたとわかるのですか？　救われたら最後まで続けられますか。これらはすべて初信

者が知っておくべきことです。一人が救われると、平安と喜びと希望があります。罪が赦され、神の子となり、将来天国に行くことができるからです(ルカ 7:48-50;使徒行伝 8:8-39;16:31-34;ローマ 5:2;コロサイ 1:5)。最も重要なことは、人が救いの福音を聞き、イエス・キリストを信じると聖霊の印を受けること(エペソ 1:13)、これは救いの証であり保証です。人はキリストの霊がなければキリストに属していないのです(ローマ 8:9)。救われたならば、聖霊が人の中に宿ります(コリント一 6:19;ローマ 8:16)、贖われる日まで(エペソ 4:30)。主を信じる者は、聖霊によって救われる保証を与えられるだけでなく、主イエスが仲介者として、神の右にあって私たちのためにとりなしのお祈りをしています(ヨハネ一 2:1;ローマ 8:34)。神は私たちを最後まで愛し、最後まで私たちを助けてくださいます(ヨハネ 13:1;ヘブル 7:25)誰も神の手から、宝の血で救われた人を奪うことができず、また天の父ご自身が私たちを愛し、誰も父の手から私たちを奪うことができません(ヨハネ 16:27;10:28,29)。三位一体の神が守ってくださるので、私たちの救いは確かです。

私たちを守ってくださる主なる神がおられますが、私たち自身も自分を守らないといけません(ユダ 1:24, 21)。わたしたちが、望みの確信と誇りと最初の確信を、最後までしっかりと持ち続けます(ヘブライ 3:6:14)。同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれません(ヘブル 3:8;4:11)。救われたのは確かではないでしょうか。いいえ、私たちは弱いですから、つまづくかもしれません(コリント一 8:13;ローマ 14:21)。しかし、あなたがたをつまずかないように守ってくださいます(ユダ 1:24)。転んでも起き上がることができることです(詩篇 145:14;箴言 24:16;アモス 5:2;ミカ 7:8)。ダビデやペテロもつまづきますが、彼らは罪を認め、悔い改めたので、主は彼らを赦してくださいました(ヨハネ 1:9;詩篇 32:5)。そうすれば、罪を繰り返して犯し、神様に赦しを求めればいいのですか？　それはできません。神は赦されても、人の行いに応じてしつけ、報われます(詩篇 99:8;箴言 3:11;ヘブル 12:6-11)。将来は救われますが、損が大きいです(コリント一 5:5)。だから、クリスチャン皆が救われた後は、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい (ピリピ 2:12)。あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにし、こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからです(ペテロ二 1:10,11)。

## 二、なぜ新たに生まれなければならないのですか？

命は最も重要なものです。人が人であるのは、人の命があるからであり、人のこの世におけるすべての生活、行動、思想、行為は人の命によるものです。人が父母から生まれた命はアダムから伝えられたものであり、肉体的なものであり、罪性ついているものであり、堕落であり、いつか死に、神が喜ばないものです。人がこの生命から離れるのは不可能です。死んで新しい生命を得なければなりません。そのために主イエスは言われました。「新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」、「水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない」(ヨハネ 3:3,5)。生まれ変わらなければ滅びるしかなく、救われる望みもないし、神の国に入り、永遠の福を得ることはできません。

### (一) 新たに生まれる必要性

個人には、人と人の間には多くの違いがあります。しかし、全ての人は同じ種類の命、一致した気質、同じ運命があります。私達の始祖が同じですので、皆は罪から生まれたものであり、肉体に属し、善がなく、神の仇であり、極悪で、それを変える力がありません(詩篇 51:5;創世記 8:21;ローマ 7:14,18;8:7,8;エレミヤ

17:9;13:23)。罪を犯して落ちてきた命は、始祖アダムと同じように、必ず死ななければなりません(創2:17;3:17-19)。ノア時代の人のように、罪は非常に大きく、一日中考えていることはすべて悪であり、地上で生きているに値せず、神に滅ぼされる予定です(創世記 6:5-7)。

神の大きな愛と憐みによって、人に沈んで滅んで欲しくないので、人を救う方法を設けなければなりませんでした。当時神はアダムと彼の妻のために子羊を殺し、皮を服にして彼らに着せられました(創世紀 3:21)。イエス・キリストが殺され、血を流すことで、私たちは身に着る義の衣服を得られ
、私たちの罪や恥が隠され、すぐには死なないことを象徴します。神はノアに箱舟を造らせ、洪水が来た時にはその中で命が守られるとおっしゃいましたが、これもイエス・キリストが私たちのために神の裁きと刑罰を引き受けてくださったことを予示しています。そうすることで、私たちは信じることによって、彼の中で救われて滅びないようになります(創世紀 6:13-18,20;1:23;ヘブル 11:7)。しかし、ノアとその息子たちが箱舟を出た後、彼らの子孫はまた罪を犯して神を裏切りました(創世紀 9:20, 21;10:8;11:4)。その破滅は免れません。この時代の終末に人類の遭う破滅のようです(ルカ 17:26-29)。神の国に入って神が造られた新天地を楽しむのととても遠いです(ペテロ 3:7,13)。ただ一つの徹底的で、人を救う方法は、人が新たに生まれることです。新しい命を得て、二度と罪を犯さないことで滅びることなく、逆に永遠の命を得、神の国に入れるようになります。これは不思議で完全な方法で、独り子のイエス・キリストはかわりに十字架上で死んで、私たちの罪が許され、私たちの古い命もなくなり、そしてイエス・キリストの死からの復活で、私たちは新たに生まれ、イエスの命のような新しい命を得ました(ローマ 6:3-7;ペテロ一 1:3,23)。

(二) 新たに生まれる経緯

新たに生まれるとはどういうことですか？　人間はどうやって生まれ変わるのですか？　もちろん再び母の腹から生まれるわけではありません。主イエスによると、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできません。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である (ヨハネ 3:4-6)。この水はどういう意味ですか？　バプテスマを指していると思う人もいますが、多くの人はバプテスマを受けても生まれ変わりません。ヨハネのバプテスマは悔い改めも必要ですが(マタイ 3:1,11; マルコ 1:4;使徒行伝 11:18;17:30)、最も大切なのは真理の言葉によって私たちは生み出されたことです(ヤコブ 1:18)。つまり、主イエス・キリストの死から蘇られる福音を信じることです(ペテロ一 1:3, 23;コリント一 4:15)。それによって救われ(ローマ 10:9,15:9;コリント一 15:2-4)、本当の永遠の命を得られます(ヨハネ 3:15;テモテ一 6:12,19;テモテ二 1:10)。

イエスを救い主として受け入れたら、聖霊が私たちの中に来て、私たちの霊が蘇って復活するようになります(エペソ 2:5;テトス 3:5)。私たちに新しい心を与え、新しい霊を私の中に入れてくださり、そして神の霊が私たちの中に住んでいます(エゼキエル 36:26,27)。こうして私たちが霊から生まれ、霊になり、私たちは肉体におるのではなく霊におるのです。聖霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることを証して下さいます。聖霊もキリストの霊です。このようにもし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのです (ローマ 8:9,10,16)。ですから、新たに生まれるのは聖霊によって人が蘇らされ、キリストの命を受け入れ、霊におる人、神の子になります。新たに生まれるのは複雑なことではなく、新しい命は中にできただけです。この新しい命はキリストのように、神の国に入れ、神の栄光の子供として、神に喜ばせ、神が人を救う目的と永遠の御旨に達せますように私たちを変えます(ローマ 8:29;エペソ 1:4)。

(三) 新たに生まれる証明

人が本当に生まれ変わったことをどうやって知ることができますか？　生まれ変わった人は神から生まれ、神の性質を持ち、多くの面で神に似ており、神の子キリストに似ていることを知ることができます。神と親密な関係と交流があります。

１,「アバ、父よ」と呼ぶ(ローマ 8:15;カラテヤ 4:6;ヨハネ 1:12)クリスチャンと呼ばれている人が、一度も祈ったことがなく、神を父と呼んだことがないなら、生まれ変わってない人であり、神の子でもありません。

２,霊の乳を愛しています(ヘテロ一 2:1)。クリスチャンといいますが、聖書を読み、神の道を聞きたくないし、霊におることに興味がなければ、まだ生まれ変わっていないし、キリストの中で赤ちゃんでもないことが分かります(コリント一 3:1,2)。

３,天国への望みがあります(ペテロ一 1:3,4)。神の子や娘には必ず天国への望みがあります。それは天の父の家でもあり、私たちの本当の永遠の家です。私たちはこの世では寄留者で(ヘブル 11:13-16;ペテロ一 2:11)、家に帰るのを待ち望みます。そこには私たちの財産があり、親愛なる主もいます(コリント二 5:1,8)。

４,正義を実行します(ヨハネ一 2:29)。神、私たちの父は正義ですから、正義を行う人はすべて神から生まれたことが分かります(詩篇 11:7;45:7;テサロニケ一 2:10)。不義の人は神の国をつぐことはないです(コリント一 6:9)。主の名を呼ぶ者は不義を離れなければなりません(テモテ二 2:19)。義を行う者が義人です(ヨハネ一 3:7)。

５,罪は犯しません(ヨハネ一 3:9;5:18)。神から生まれた者は罪を犯しません。罪を犯した者は神を見たこともなかったし、神を知ることもないです(ヨハネ一 3:6)。ここで言う生まれ変わったクリスチャンがいつも、習慣的に罪を犯さないことを指します(原文の意味)。罪に対する認識と態度を指しています。彼はまだ肉体があるので、時には罪を犯すかもしれません(ヨハネ一 11:8-10;2:1;カラテヤ 6:1)。心の中に神の命があるので、罪を犯したくありません。罪を犯したら、悲しまなく、罪を憎まなく、悔い改めなければ、新たに生まれた人であることを証明することはできません。

６,愛があります(ヨハネ一 4:7)。愛のあるものはすべて神から生まれ、神は愛だからです。愛がないクリスチャンがいます。神の子供に対して愛がなければ、彼が神から生まれたことを証明するのは難しいです(ヨハネ一 5:1)。イエスに似ていないからです。

7,信仰があります(ヨハネ一 5:4)。世界からの試み、誘惑、迫害、苦しみに勝てなければ、信仰がないことが分かります。神の子であることを証明するのは難しいです(ペテロ一 1:5;ヘブル 12:2;テモテ二 1:7)。

新たに生まれたら、自分も周りの人が知ることができます。必ず生活で現れるからです。世の人、昔の自分と違って、神の子供の名に相応しく、天におる、霊におる香りがありますので、本当のクリスチャンだと皆が知るようになります。

## 三、主を信じるとバプテスマを受けるべきでしょうか。

一人の人が主を信じた後にバプテスマを受けることは、神の意思で、主の命令と使徒の教訓であり、非常に重要で、意味もあります。軽率でいい加減の態度で見ておらず、極めて慎重にしないといけません。故意に遅らせてはなりません。神に喜ばせますように、初信者に聖書に書いてある命令、教訓と模範を見ましょう。

### (一) バプテスマの重要性

主イエスは復活された後、昇天される前に、11 人の弟子、使徒に「天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施してください」と言われました(マタイ 28:18,19)。これは主の大使命と言われ、すべての信者、特に伝道師は守らなければなりません。また彼らに「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる」と言われました(マルコ 16:15,16)。

主の命令は次のとおりです。

1、全世界に出て行って福音を伝え、全ての国民を主の弟子とします。

2、父と子と聖霊との名によって彼らにバプテスマを施します。

3、弟子たちに主のすべての命令を守るように教えます。

だから、福音を受け入れたら、主の弟子はバプテスマを受け、主の弟子であることを証明することができます(ヨハネ 4:1)。

主が「信じてバプテスマを受ける者は救われる」と言われたのは、バプテスマと救いとの関係を示しています。イエスを信じることで救われるのではないですか？　はい、でもどうやってあなたが本気で信じていることを示しますか？　バプテスマは信仰の表示と証明です。バプテスマは人の前でイエスを主として認めることです。「自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」と聖書に書いてあります(ローマ 10:9)。心の中だけで信じ、外で口で認めないのは不十分です。信じずただバプテスマするだけでは救われないです。もしすでに信じていて、バプテスマを受ける機会がなければよいのですが、たとえば主と同じく十字架にかけられた強盗。しかし、機会があればバプテスマを受けるべきです。パウロはダマスコに行く道で主イエスを受け入れ、信じていました。三日を経って、主は彼にバプテスマを施すためにアラナニアを遣わされました(使徒行伝 9:5-9,18)。彼はバプテスマを受けた時、必ず主の御名を唱えたので、彼の罪を洗うことができました。御名を唱える者は必ず救われます(使徒行

伝 22:16;ローマ 10:13)。宦官であるエチオピヤ人 が、ピリポからイエスの福音を聞いて、すぐに信じて、道でバプテスマを受けました(使徒行伝 8:35,35,36,38)。またピリピの婦人ルデヤと獄吏の一家も、信じたらすぐバプテスマをうけました(使徒行伝 16:14,15,31-33)。しかし、私たちは今日伝道する時、聞いている人の心が刺されたように使徒ほど能力がなく、あまり速くはできません。ペトロがペンテコステの日に福音を聞いて、本当に感動した人に「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりひとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。」と言いました (使徒行伝 2:37, 38)。それで、信じて悔い改めてからバプテスマを受けます(使徒行伝 8:12;20;21)。悔い改めがなければ信仰も真ではないのです(ルカ 15:7;24:47;使徒行伝 5:31;ヘテロ二 3:9)。ですから、人にバプテスマを施すのは急いではならず、人が本当に悔い改めて主を信じるのは肝心です。

(二) バプテスマの意味

バプテスマは、御父と御子と聖霊の名によって人にバプテスマを施すことであり、いわば人が父と子と聖霊の名に帰するようにバプテスマを授けます(マタイ 28:19)。主イエスの名によってバプテスマを受けるとは、キリストに属するのを意味します(使徒行伝 19:5;ガラテヤ 3:27-29)。特に彼とともに死、葬られ、そして彼とともに復活します(ローマ 6:3,4;コロサイ 2:12)。その後、新しい人となり、新しい人としての行動をし、キリストが死からよみがえったように、キリストを着るように生まれ変わりました。このバプテスマは罪を赦し、救われ、生まれ変わり、神の前に損のない良心があることを示しています(ペテロ一 3:21;テトス 3:5)。

水のバプテスマは血のバプテスマ、火のバプテスマ、霊のバプテスマとは違いますが、清める意味が含まれています。特に水のバプテスマを受ける人は同時に霊のバプテスマを受けるべきです。(使徒行伝 2:38,10:47;コリント一 10:2)。同時じゃなければ、霊のバプテスマを後で(徒 8:15-17:19:2,5,6)必ず受けてください。それによって、バプテスマの実際の意味は私たちの上に成就できて、霊のバプテスマは主イエス自身が直接にされたもので、コリネりオの家で行われたようです。しかし、時には使徒たちの按手を通してされ、サマリアとエペソでペテロとパウロを借りて行われたようです。バプテスマは主イエス・キリストに結ぶのを表明し、一つになることが最も重要です(コリント一 12:13)。私たちは主の中にあり、主も私たちの中にあって、主の十字架に結び、共に死に、罪から離れ、彼の復活にも結び、共に生きています(ローマ 6:5-11)。このように、私たちは罪に対しても自分が死んでいるように、神に対したらキリストにあって自分が生きているように見ます。私たちはこのように主に結んで一つの霊となり、キリストは私たちの命となります(コリント一 6:17;コロサイ 3:1-4)。バプテスマは儀式ですが、大きな奥儀がそこにあり、キリストと教会の結びのようです。しかし、前提は神を信じることです(エペソ 5:32;コロサイ 2:12;エペソ 3:17)。

(三) バプテスマの実行

バプテスマの条件は信じることと悔い改めることです。バプテスマは信じる当日に行われてもいいし、バプテスマ者の信仰と決意を見ながらまた、バプテスマを施す適切な人が現れるまでしばらく待つこともあります。イエスの弟子や使徒たちは人のためにバプテスマを施すことができます(ヨハネ 4:2)。ペンテコステの日には 1 日 3000 人、あるいは 5000 人がバプテスマを受けました(使徒行伝 2:41;3:4)。それは 12 人の使徒たちだけがバプテスマを授けたわけではなく、福音を宣べ伝えたフィリピもサマリア人にバプテスマを施しました(使徒行伝 6:5;8:12;21:8)。ペトロが六人の兄弟を連れてコリネリオの家に行って伝道した後、主イエス・キリストの名によって彼らにバプテスマを授けるように人に命じました。ペトロ自身ではなく、同行した六人の兄弟に命じて

人にバプテスマを授けさせたことがわかります(使徒行伝 10:23,47,48;11:12)。パウロはコリントでは数人にしかバプテスマを授けなかったので、バプテスマを施すのは必ずしも使徒たちではありませんでした(コリント一 1;14-17)。

バプテスマの儀式については、点水と頭に水をかけるのと人に水に浸させるのがあります。ヨハネ、イエスと弟子たちがヨルダン川でバプテスマを受けたり、施したりしたとされています(ヨハネ 3:22;マタイ 3:16)。ピリピは宦官のためにバプテスマを施し、水のあるところに行って、 二人は水の中に下り、水の中から上ってきたとされています。浸礼であることがわかります。また、浸礼は主との同死、同埋葬、同復活の意味にも合致します。この問題はいつもさまざまな宗派で議論されます。バプテスマは聖書により浸礼を進めますが、もし病気で寝ている人がいたら、死ぬ前に主を信じたい場合、そのために点水の礼をしてもいいです。主の名の下に帰する機会を失わせて、恥ずかしく主に会わせるのはよくありません。形に縛られ、互いに排斥し、主の中に一つとして互いに愛し合う真理に反しています。教会が一つになる条件は一主、一信、一洗です、具体の洗い方に縛られないで、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けます。バプテスマの儀式とやり方のことでキリストの体を分裂させてはなりません。

このようにしてバプテスマを受けた人々はみな、聖書に記された、互いに接し、パンを食べ、祈るような主イエスと使徒の教えをぐらつかない心で守るべきです(使徒行伝 2:42)。信者は皆同じ所で暮らし、物も皆共用する記載がありますが、それは当時の模範で、教会の信者への命令ではないですから、不要な問題が発生しないように真似しなくていいです(使徒行伝 2:44;4:32;5:2,3,6:1)。使徒パウロの教えによれば、神の家では、教会がどのように行動するかのを知ることができます(テモテ一 3:14:15)。

# 四、信者は聖書を読む必要がありますか?

クリスチャンの信仰生活において、祈りと聖書を読むのは非常に重要で、二つの翼が天の道を走っているようで、一つが欠けてはならず、二つが互いに補い合います。聖書を読むのは神の御言葉を聞くことで、祈りは神に話すことです。先に御言葉を聞いてから、神に適切な言葉を言うことができます。先に聖書を読んで神の御心を理解してから、御心によって有効のお祈りをすることができます。聖書を読む人は、より多く祈ることができます。神の御言葉が豊かであれば、祈りの内容も豊かになります。聖書を読むのは祈りに役立つだけでなく、私たちの霊の命、導き、戦い、仕事などのすべての面にも役立ちます。極めて重要です。

(一) 聖書を読む効果

１,ミルクのよう、糧のよう(ペテロ 2:2;エレミヤ 15:16)

御言葉は霊の乳のように、生まれたばかりの赤ちゃんにも必要です。もし神を慕わなければ、この人は新たに生まれていないかもしれないです。しかし、信仰のある信者は御言葉を慕い求め(詩篇 119:20, 24, 35, 47,140)、昼も夜も思うぐらいです(詩篇 1:2;119:97)。いつも聖書あるいは新約＆詩篇の本を携帯し、愛着して暇があればすぐ開いて読むクリスチャンがいます。ある盲人の女性は、指で聖書を読んでいたが、指が硬くなったので、彼女は泣き出して、聖書に口づけをしたところ、唇と舌を使って聖書を読むことができるのを発見し、その後、唇と舌で読むようになりました。

２,ともしびのよう、光のよう(詩篇 119:105)

御言葉はわが足元のともしび、わが道の光のようで、暗闇に陥らないように天国に行く道も日常生活の道も照らすことができます。

３,雨のよう、水のよう(申命記 32:2;イザヤ 55:2,10,11)

御言葉は私たちの心を潤し、私たちの霊の渇きを癒すことができます。そして、聖なる者になりますように水のように私たちを清められます(エレミヤ 5:25;ヨハネ 15:3;17:17)。

４,火のよう、鎚のよう (エレミヤ 23:29;20:7, 9)

御言葉は大きな力があり、強い心とすべての抵抗の勢力を砕くことができます。火のようにすべての汚い思想と行為を清め、焼き尽くすことができます。

５,剣のよう、鏡のよう(ヘブル 4:12;エペソ 6:17;ヤコブ 1:23)

御言葉は聖霊の剣のように人の心を突き、敵にも勝つことができます。イエスは、御言葉で、サタンの誘惑を打ち負かしました。また鏡のように、人の目を明るくでき、魂を生き返らせます。

6,宝のよう、蜜のよう(詩篇 19:7-10, 119:72,103)

御言葉は蜜より甘く、多くの純金より慕わしいですが、残念ながら、多くの人はまだ味わって、発見していないです。

７,むちのよう、つえのよう(詩篇 23:3,4)

田舎を歩いたら、天気や地形によっては杖を使う人がいます。私たちが様々な出会いや困難に出会った時のように、御言葉が私たちを支え、慰めてくれます。

聖書の御言葉は非常に豊かで、貴重で、役に立ちます。豊かに心の中に宿らせなさい(コロサイ 3:16)。

(二) 聖書を読む準備

聖書を読むのには適切な準備と正しい態度が必要です。

1,恐れる心(詩篇 111:10;25:12, 14)

神は喜んでご自分の言葉をご自分を恐れる者に教えます。神を恐れることは知恵の始まりで、神を恐れる心がなければ、聖書を読むのは普通の本を読むように、直接に神から御言葉を得ることはできません。

2,清い心(マタイ 5:8;詩篇 51:10)

清い心のある人は神を見ることができます。人の心は清くなければ、良心には欠陥があり、神を避けたい傾向があれば、同時に神も彼に隠れています。神との関係に問題があれば、聖書を読んでも何も得ません。清い心は神以外に他の愛する望むものがなく、心の中には神だけです。そうやって聖書を読むと、まるで神様が自分に語りかけているように、神様が現れてくださいます。

３,静かな霊(ルカ 10:39;ハバクク 2:20)

湖水が穏やかでないと岸上の山林の美しい景色をきれいに映すことができません。同じように、静かな霊がなければ、聖書の奇妙さを映すことができません。聞くには静かな態度が必要です。聖書を読むのも同じです。静まりは神の前にあるべき態度であり、紛らわせる霊は、神の心を知ることができなません。

４,見張った霊(ハバクク 2:1;雅歌 2:8;5:2)

見張った霊がなければ、文字だけが見え、声が聞こえず、神が聖霊によって私たちに話しているのを感じられません。眠っている人の前では、すべての景色の動きが滑り去って、何の印象も残りません。見張った霊しか霊界に開き、霊におるものの動きを察知することができません。

5,目は開き(詩篇 119:18)

神のおきてのうちのくすしきことが見えますように私たちの霊の目を開けるように神に願いましょう。すべてのことに限界がありますが、ただ神の命令が及ぶ範囲が極めて広いです(詩篇 119:18,96)。神が目を開いてくだされなければ聖書が他の本との違いが見えません。霊界のことも見えません(列王記二 6:17;エペソ 1:17,18)。

６,心は開き(ルカ 24:45)。

この心は人の悟りであります(詩 119:34,44)。主が悟りをあたえてくださらなければ、聖書を理解することができません。そうでなければ、見ても分からないで、まるで心を曇らせたようです(マタイ 13:14,15)。聖書を読んでも、その真意が分からない人がいます。

7,奥儀を示す(コリント一 2:7-11;エペソ 3:3-5;アモス 3:7)

神が奥儀をご自分のしもべに示さなければ、私たちは何も神のことを知ることができません。啓示の霊が必要です(エペソ 1:17)。キリストが最大の奥儀です(コロサイ 1:27;2:2)。聖書はキリストについて証するものであり(ヨハネ 5:39)、キリストご自身を示してくれます。聖書を読んでもキリストが分からないのはもったいないです。

(三) 聖書を読む実行

聖書を読む方法は多いですが、人それぞれであり、また方法によって効果が違います。霊の状況に応じて、以下の読み方をおすすめします。

1,速読：聖書は 66 巻、1189 章、三万千百七十三節があり、官話と合訳本によって、約 969200 字があります。一日一章を読んでいけば、三年と三ヶ月で一回を読むことができます。一日に数節だけ読めば生涯をかけて一回も終われないかもしれません。だから速く読まなければ、前後の一貫性と内容に一致性を見ることができません。

2,順読：聖書をより全面的に理解できるように、創世記から黙示録まで順を追って読むべきです。毎日 40 章を読めば、月に一回読み終わることができます。平日に三章を読み、休日に五章を読めば、年に一回読み終わることができます。

3,多読：繰り返し読むことです。時間があればすぐ読みます。読めば読むほど、内容を理解しやすくなります。

4,熟読：分からないか覚えていない箇所を集中して読むこと。重要な文章はさらに暗記、よく噛み、食べていくべきです。

5,細読：名前や月数、年代まで、あらゆる字句や節に注意して読むことです。

6,精読：その中の構造、性質、目的が分かり、その中の奇妙さ、完全さ、美しさが見えますようにさらに読む方法です。

7,深読：隠れている霊におる意味を見ることができ、神の声を聞いて、永遠の御国に入ることができますように深く読むことです。

聖書を読むのには段取り、計画、重点があります。

1,聞く：聖書を読むのは文字を見るだけでなく、声も聞くべきです。聖霊が私たちに話してくださいます(黙示

録 2:7;ヘブル 3:7)

2,学ぶ：聞くのは謙虚に受け入れることですが、学ぶのは自発的に求めることであり、神の教えを求める以外に、時には人から学ぶこともできます(テモテ二 3:14-15;使徒行伝 18:26)。

3,覚える：御言葉を心に留め、忘れてはなりません(詩篇 119:141,176;申命記 6:7-9)。正確に覚えるように聖句を多く暗記してください。

4,思う：御言葉を聞いたり、学んだり、覚えたりするだけでなく、思うのも大事です。御言葉を思い、吟味する人は幸いです(詩篇 119:15,45;1:2)。

５,調べる：聖書をさらに正確に理解できますように調べなければなりません(使徒行伝 17:11;イザヤ 34:16;詩篇 119:145)。参考、対照、比較が必要です。

6,刻む：聖書を読むのは知識を増やすためだけではなく、心に深く刻み、恐れ、御言葉に逆らわないためです(詩篇 119:11;コロサイ 3:16)。

7,聖書を読んでも行動に移さないのは何の役にも立ちません(詩 119:1, 3,35,48,87)。砂の上に家を建てるようで、いずれ倒壊しなければならないです(マタイ 7:24-29)。実際に御言葉を生かす人は主にほめたたえられ、将来、神に安心して申し開きできることが分かります。

聖書をどのように調べ、理解し、解釈し、教えることについて、学び、研究すべきことはたくさんあります。初心者は、聖書を読んだら、生活で実行すればよいです。

# 五、どのように祈るべきですか。

クリスチャンの信仰に、聖書を読むのと祈りは非常に重要です。聖書を読むのが糧のようであれば、祈りが呼吸のようです、表裏一体です。祈りのないクリスチャンは死んだクリスチャンと言えます。祈りは恩恵を受ける唯一の道であり、古今千万の聖徒はこのために証言することができます。聖書は祈りに関して多くの教えがあり、多くの実例を挙げ、祈りに関する約束も特に多いです。詩篇は祈りの本であり、祈りを学ぶ人にとって最も役に立ちます。よく読み、多く読み、深く読むべきです。

(一) 祈りの意味

祈りには多くの重要な意味があります。

1,礼拝(ネヘミヤ 9:3;ヨハネ 4:24;ルカ 19:4)

祈りの最も重要な意味は、祈りを通して神を礼拝することです。聖殿は神を礼拝する場所で、祈りの家と呼ばれています(マタイ 21:13;サムエル二 12:20)。万民、特に神の民が礼拝すべきです(詩 66:4;86:9;99:5)。新約時代ではさらに霊と真をもって神を礼拝すべきです(ピリピ 3:3)。

2,奉仕(出エジプト 4:23;9:1)

万民は神に仕えるべきで、ご自分の民はさらに仕えるべきです。お祈りは香と生け贄のようなものです(詩篇 141:2;黙示録 5:8)。毎日祈ることのない信者は、毎日神に生贄をささげることもなく、神に仕えることがありません。心をもって仕えるべきです(ローマ 1:9;2:29;7:6)。

3,願い(マタイ 7:7;詩 18:6)

願いはもちろんお祈りの最も多くの部分と内容です。私たちは多くのニーズと困難があるため、神様の助けと解決を求めないといけません。求めがないと、私たちが乗り越えられません。幸いには私たちは天に通じる道があります。私たちの父も喜んで私たちの祈りを聞いてくださいます。求めよ、そうすれば、与えられます。捜せ、そうすれば、見いだします。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえます。神様の前に来て、お願いすればいいです。

4,交わり(詩篇 27:8;ヨハネ一 1:4)

祈りは一方的に神に祈るだけではなく、両面的に神と交わることでもあります。残念なことは神に祈ることが多くても、神との交わりが少ないことです。祈りを通して神に会い、慈愛なる御言葉を聞かないことはとても残念です。

5,お祈り(イザヤ 45:11;エゼキエル 36:37;マタイ 9:38)

神は私たちのお祈りによって一緒に働き、ご自分の目的を達成することを望んでいます。実は私たちが神のためにできる最大の仕事は祈ることです。祈りがなければ仕事もないし、神の仕事もできません。

6,戦い(マタイ 18:18;出エジプト 17:11;ヨシュア 10:12)

わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、闇の世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いです(エペソ 6:12;2:2)。そのためには、神から授かった武具で身を固め、武器を使わなければなりません。その中で最も大切なのがお祈りです(エペソ 6:18)。モーセが山の上で手を挙げて、イスラエル人は山の下で勝ったようです。

7,助け(ピリピ 1:19;コリント二 1:11;ローマ 15:30)

私たちは直接人を助けるのに多くの制限があり、人に益を与えないときがたくさんあります。しかし、人のために祈ることは無限の力、絶大な効果があります。

## (二) 祈りの原則

子供も祈ることができますが、より深く、より効果的な祈りをするには、いくつかの霊の原則に従う必要があります。

1,信仰を持って(ヤコブ 1:6;5:16;マルコ 11:24)

信仰のないお祈りは空気を打つように、神に答えられません。信仰をもって祈れば、神の栄光を見ることはできます。山も除けられます。

2,主の御名による(ヨハネ 14:13;15:16;16;24)

主イエスの名はすべての名にまさる名 (ピリピ 2:9)。神の前に最も喜ばれる有能な名です。私たちは主の御名によって、病気を癒したり、鬼を追い払ったり、奇跡を起こしたりすることができます。私たちは主の御名によって祈ると、すべてのことが成就され、イエスよりも大きなことをすることができます。

3,御心に従う(ヨハネ一 5:14;マタイ 26:39;ローマ 8:27)

私たちが自分の意思で神に祈るなら、必ず得られるわけではありません。御心に合わなければ、得ても益がないからです(詩篇 106:15)。しかし、御心は私たちにとって善であって、神に喜ばれ、かつ全きことです(ローマ 12:2)。

4,聖霊に頼る(ローマ 8:26;エペソ 6:18;ユダ 20)

わたしたちはどう祈ったらよいかわからないですが、御霊みずから御心によってわたしたちのためにとりなして下さります。だから、私たちは聖霊の中で祈り、御導きに従い、御力に頼って、御助けを得なければなりません。

5,御言葉を聞く(箴言 1:24, 25, 28;ゼカリヤ 7:13)

私たちが神の御言葉を聞かず、置き去りにし、御戒めをないがしろにしたら、私たちが神に祈っても、答えられません。お祈りが神に聞かれない場合、自分がよく神様の言葉を聞き、神様の命令を守っているかどうか反省しなければなりません。

6,罪を除くべき(箴言 28:9;詩篇 66:18;イザヤ 59:1, 2)

罪は神が私たちの祈りを聞いてくださるのを妨げることができます。もし私たちが心の中で罪を重視し、取り除くことができなければ、主は私たちのお祈りを聞いてくださらないでしょう。人の過ちを許さなければ、祈りは妨げられます(マルコ 11:25)。妻をないがしろにしたら、祈りは妨げられます。人と仲直りする必要があります。(ペテロ一 3:7;マタイ 5:23:24)

7,悪い求め方を避ける(ヤコブ 4:4)

私たちはすべてのことを祈ることができますが(ピリピ 4-6)、悪い求め方をしてはいけません。それは神様が許さないことです。自分の意思のままに祈りすぎたら、答えられにくいです。

(三) 祈りのテーマ

多くの信者が求めていることの大半は衣食についてですが、これはすべて異邦人が求めていることであり、利益を得ても大きくはないです。実は、求めなくても、神は私たちのことを顧みてくださるので、私たちはその重要で不可欠な霊の祝福を求めるべきです。

1,神の国(マタイ 6:33)

これは主イエスが私たちに教えてくださったものです。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」神の国と神の義に関しては、イエス様が弟子への教えとして聖書に明確に書いています。へりくだり、心を清め、義のために迫害され、律法学者とペリサイ人の義に勝ち、怒らず、心の中で姦淫せず、勝手に誓わず、敵を愛し、財産を地上に蓄えず、二人の主人に仕えず、人を裁かず、狭き門に入り、小道を歩き、天の父の意に従わなければなりません(マタイ 5-7)。

２，聖霊(ルカ 11:13;エペソ 1:17,18;5:18)

より良いもの、聖霊を求めなさいと主が教えてくださいました。聖霊が既に私たちの中に宿っておられますので、さらに聖霊の充満を求めましょう。聖霊の臨在と働きがなければ、すべての霊におる求めが空っぽになります。

3,知恵(ヤコブ 1:5;列王記一 3:10;詩篇 90:12)

知恵は重要で、箴言書に多く述べられているので、神が与えてくださるように祈りましょう(箴 2:2;3:14;9:10;15:32,33;16:22)。

４,清い(4:3:7;彼の前 1:15,16)

清いは神のさらなる御心と命令であり、求めなければならない。(コリント二 7:1;エペソ 5:25-27;ペテロ一 1:15;ペテロ二 3:11)。清くない者は主に会うことができません。(12:14 に来ます)

５,勝利(詩篇 44:4:黙示録 12:11)

主は勝利者であり、ご自分に従う者も勝利することを望んでおられます。黙示録の 7 通の手紙の中で、主は特に私たちを勝利者として召してくださり、それは極めて重要です(ルカ 2:7,11,17,26;3:5,12, 21;ローマ 8:37)。

6,愛(コリント一 12:31;13:1-8)

愛はより大きな賜物ですし、最も素晴らしい道で、主の新しい命でもありますので、必ず求めなければなりません。

7,主の前に立つ(ルカ 21:36)

多くの信者はまだ世の中で楽しくうまく過ごすことを求めているのではないでしょうか。大災難を逃れ、主の前に立つことができるように目を覚まし、よく祈る人が少ないです。しかし、世界はもう終わりに近づいており、主がこられる日が近づいています。置き去りにされ、後から来るのが遅くなった 5 人の愚かな童女のようにならず、主の前に立てるように祈ることは大切です。ですから、その日が突然来ても、自分が準備できているように、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい(ペテロ一 4:7;テサロニケ一 5:2)。

# 六、信者は神に仕えるべきですか?

奉仕は信者の生命の転機に肝心な一環であり、奉仕するかどうかを通して、信者と信者の間の差がわかります。自分を神に捧げ、奉仕の生活を送ることは私たちと神の関係の基礎です。これがなければ、今後すべての霊におる求めは無意味になり、実際の効果もありません。現世の日々が無駄になるだけでなく、将来御前で申し開きすることもできません。奉仕は神の要望でもあり、私たちの本分でもあります。永遠の価値がありますので、決して無視したり、飛ばしたりしてはいけません。財物を捧げる問題については後で話しますが、まず霊におる奉仕についてここで話します。

(一) 奉献の根拠

1,神の憐みによって(ローマ 12:1)

パウロは「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」 と言いました。先に申し上げたように、私たちは本来罪人ですが、神の大いなる愛によって、私たちのために独りの子が命を捨てて死に、私たちがそのため神の子供になりました(ローマ 3:23,24;5:8-10;8:16,17,32)。それはどれほど大きな恵みでしょうか。私たちが体を捧げるのは当然ではないでしょうか。

2,血を流す代価(コリント一 6:20;出エジプト 13:2)

主イエスは、私たちの贖いとして、血を流し、大きな代価を払いました(黙示録 5:9,10;マタイ 20:28)。私たちは、もはや自分のためではなく、主のため生きる人です。生きても死んでもすべて主のために行うべきです(ローマ 14:7,8)。

3,主の愛の励まし(コリント二 5:14)

主の愛は私たちを励まし、私たちのために十字架にかけられ死にました。主とともに私たちが死んだことに等しいです。私たちのような主が代わりに死んでくださった人がもう自分のためじゃなく、主のために生きているためです。伝説によると、主の死によって解放された盗賊バラバは、主のかけられた十字架の下に来て、「それは私が上にいるべきものだったのに、イエスにかけられた」と悔い改めました。そのあと、「 私の代わりに主が死に、私は主のためにも生きます」は彼の生涯の標語になったそうです。

４,御心(コリント二 8:5)

私たち自身を主にささげるのは神の御心で、だから私たちが好きか嫌いかと関係はないです。神の独り子は無駄に命を落とし、贖われた私たちがいつものように罪の中で生きるのを神が許せません。もし私たちが自分の心、私たちの体、私たちの愛、すべてのものを含め、完全に主に捧げるのは確かに神の御心です(箴言 23:26;歴代一 29:14)。

(二) 奉仕の模範

主に少しのお金を捧げたら胸が痛い人はもっと大きな奉仕できるとは考えられません。しかし、聖書には神を愛し、すべてを捧げた例が書いてあります。

1,アブラハム(創世記 22:1-15)

神は彼に愛する独り息子のイサクを生贄として捧げるようにおっしゃいました。彼は疑わず息子を連れて行き、神が指定された山で祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛り、薪の上に置かせ、彼の体を灰にするので、ナイフを持って息子を殺そうとしました。これはなんと残酷なことでしょう。しかし彼は神を敬い、神を愛するためにしました。神も独り子を十字架にかけられたではないでしょうか。アブラハムが捧げたものは少なくはなかったですが、神は彼に息子を返されました。その上、天の星と海の砂は数えられないぐらいの子孫を与えてくださいました。

2,貧しい未亡人(マルコ 12:41-44)

主イエスは貧しい未亡人が神殿の箱にレプタ二つ（一コドラントに当る）を投入したことに気づかれました。

イエスは弟子たちに「この貧しい寡婦はだれよりも入れた。みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」とおっしゃいました。主は人が入れた数を見るのではなく、人が入れた数が持っているすべてを占める割合を見ています。ほかの人は持っている 100 の中、50 を入れましたが、彼女が入れたのは 100%で、完全で、しかも彼女のあらゆる持ち物です。彼女の命を捧げたのと同じです。今はこんなに献金できる人はいますか？

3,マリア(マルコ 14:3-9)

主イエスが重い皮膚病の人シモンの家におられた時。一人の女、すなわちマリヤ(ヨハネ 12:1-3)が非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、それをこわし、香油をイエスの頭に注ぎかけました。その香油は三百デナリ以上の価値があり、下女として、おそらく長年の苦労で貯めてきたかもしれません。彼女がつぼを破ったのは、自分の体を破ることに等しいです。香油を捧げるのは、彼女の心、彼女の愛、彼女の命を捧げたことを代表しました。保留せずに完全に主に捧げました。彼女は力を尽くして、あらかじめ主の葬りの用意をしました。何と尊いことでしょうか。全世界で記念され、主が身を捨て血を流した福音にふさわしいです。周りの人は文句を言っても、主の称賛があれば十分ではないでしょうか。

4,パウロ(ピリピ 3-7-8)

パウロは主に出会った後、すべてのことを損と思うようになり、キリストのためにすべてのことを捨ててふん土のように思いました。彼は主イエスのために命を投げ出しました(使徒行伝 15:25,26;20:24)。彼は祭壇の上に自分を完全にささげ 、自分がもう死んでキリストだけが自分の中で生きていると思いました(ガラテヤ 2:20)。自分なしでキリストのために生きています(ピリピ 1:21)。

(三) 奉仕が必要

神の民が神に仕えるのは当然です。神に造られ、贖われたものは神に仕えるべきです(ダニエル 7:10;詩篇 100:1;出エジプト 8:1;マラキ 1:6)。旧約聖書の祭司は特別に神に仕える者ですが(歴代二 13:10)、新約聖書のすべての信徒は祭司です(ペテロ 2:9)。どのように神に仕えるべきですか。旧約聖書の祭司は主に神殿で、新約聖書は教会で神に仕えました。生贄を捧げ、香を焚き、神殿で奉仕するのは祭司の仕事でした。そのように、新約の信徒も霊におる生贄をささげなければなりません(ペテロ 2:9)。体を捧げ、感謝、讃美、善行、献金、伝道を生贄として捧げるべきです(ローマ 12:1;詩篇 50:23;ヘブル 13:15, 16;ピリピ 4:18;ローマ 15:16)。

香を焚くのは祈りを示します。私たちは祈りで神に仕えることができます(詩篇 141:2;黙示録 5:8)。しかし、今日の多くの信者の仕事は、幕屋の庭の仕事にしか集中しません。教会の奉仕で忙しい人が多いです。悪いとは言いませんが、高いレベルの奉仕ではないです。そのため、教会にはとりなしのお祈りする人が足りません。84 歳の未亡人のアンナのように断食し、祈り、昼夜神に仕える人はもっと少ないです(ルカ 2:37)。

多くの信者の教会で奉仕したい気持ちは良いですが、清い、正義、敬虔で畏れる心で神に仕えることを覚えましょう(ルカ 1:75;ヘブル 12:28)。肉体の熱心で、異火を捧げたり、契約の箱に手を伸ばすことは神が許せま

せん(レビ 10:1, 2;サムエル二 6:6~7)。主の道と神に喜ばせる戒めに従って、心を込めて神に仕えなければなりません(使徒行伝 24:14;ローマ 1:9;7:6;14:17,18)。

それは私たちが神に仕えることができないとか、必要ではないということではありません。熱心で、倦むことなく、霊に燃え、主に仕えるべきです(ローマ 12:11)。心を尽くして神に仕えるべきです(申命記 10:12)。主のわざを行うことを怠ってはなりません(エレミヤ 48:10)。神はいつかご自分に仕えるものとそうでないものを分けられます。(マラキ 3:18)

教会の中だけでなく、私たちの家の中でも神に仕えなければなりません(ヨシュア 24:18)。家の中に祭壇を立て、家族で一緒に礼拝、賛美し、祈ります(創世記 12:7,8;13:18)。新約聖書のプリスカとアクラの夫婦は、どこにいても、彼らの家には教会があり、神も彼らを通して大切な仕事をなさいました(コリント一 16;19;ローマ 16:3-5;使徒行伝 18:26)。それぞれいただいた賜物をもってお互いのために仕え、すべてのことにおいてイエス・キリストによって、神があがめられるためです (ペテロ一 4:10, 11)。

# 七、人間として生きる本分と原則

信者として生活において自分の本分と原則を知っておくべきで、これも重要です。その中には神の意志と主の命令があるので、私たちが真面目に考え、生かしていくべきです。

(一) 教会活動

私たちは主を信じ、洗礼を受けて教会に入った後、どのように教会を扱い、教会の活動に参加し、責任を果たすべきですか。

一,集会に参加

集会は教会の建設、信徒の成長、生命の交わり、真理の認識、そしてあらゆる面での霊におる成長に関係があります。教会の良し悪しは集会の様子から分かります。「集会を止めてはいけない」という教訓が聖書に書いてあります(ヘブル 10:25)。集会に参加しない信者は弱くて失敗し、転びやすいに違いありません。教会にはどんな集会がありますか。

1,主日礼拝:一般的に教会はとても重視し、参加者が最も多くて、教会の魂のように盛り上がっています。内容は歌、祈り、説教、報告、献金などです。

2,祈りの集まり:ほとんどの教会にはあります。一緒に集まって教会や国のために祈ります。信徒の家庭、個人のために祈るのもあります。例えば、結婚、職業、病気、悩みなど。しかし、神の国、教会の復興、信徒の霊

における成長のために祈ることは多くなく、足りないです。

3,聖書勉強会:一緒に聖書を勉強するか、導く人が先に説明してから、皆が発言し討論したり、分かち合ったりすることができます。

4,このほかにも、教会には、聖餐式、証し、交わり、伝道活動など、さまざまな集まりがあります。状況や必要に応じて参加してください。強制ではありません。

二、献金

旧約のイスラエル人は 1/10 をささげました。新約の教会には決まった規則がないので収入に応じて手もとにたくわえ、捧げてよいです。旧約の人よりも恵まれている私たちは旧約の人よりも寄付が少ないはずはないですが、惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきです(コリント一 16:1,2;コリント二 8:3, 19;9:5,7)。この他に特別献金があるかもしれませんが、ここで言う 1/10 の献金とは違います。

三、お互いの交わり

教会の兄弟姉妹の間には交わりがあるべきであり、主の命令を実行し、互いに愛し合い(ヨハネ 13:34-36)、互いに助け、励まし、受け入れるためです(コリント一 12:25;エペソ 4:16;ローマ 12:15;ガラテヤ 6:2;エペソ 5:19)。ただキリストの中で、聖霊に頼り、愛により、心を一つにし、光の中で、真理に従うべきです(ピリピ 2：1-3;ヨハネ一 1:7;ヨハネ二 2:2, 4)。世俗的な単純な人の交わり、一緒に食べたり飲んだりするようになってはいけません。しかし、もし兄弟と称するものが、罪を犯すもの、不義のもの、従わないもの、結党のもの、異端を伝えるもの、いずれもそれらと交わることができず、ある人と関係を切らないといけません(コリント一 5:11;6:9;コリント二 6:14-16;エペソ 5:11;テサロニケ二 3:14;テトス 3:10;ヨハネ 2:9-11)。また、男女、老若はそれぞれの本分によって行うべきです(コリント一 7:1;ペテロ一 5:5)。聖書の教えと聖徒の手本に従って行い、明るく、正直で、敬虔で、イエスらしくなければなりません。

四、主に証する

信者の中で、もう一つ重要なことは、主に証することです。これはクリスチャンの本分であり、内なる命の運動でもあり、また祝福の道でもあり、人と主の恵みを分かち合うことは、神の光栄を表すことです。証を全然しない人が、救われた人だと言えません。証が少ない人は、霊における状況がきっとよくなく、すでに弱くて失敗しているかもしれません。証とは、自分の主に対する認識と経験、恵まれた経緯と神があなたを通してなされたことです。ほかの人も主に出会い、神に栄光をお返しするように、自分が見、聞き、学び、受け取り、分かり、信じていることを伝えるわけです。自分の栄光を求め、自分の得た恵みを大げさに言うことではあり

ません。言葉だけでなく、生活や行為においても主に証をしなければなりません。キリストは私たちの救い主で、私たちの主でもあり、私たちの生命で、喜びと力でもあり、私たちの良い牧者、元帥、花婿と永遠の望みであることを証言します。

（二）人としての本分

神は私たちを地上に置いてくださり、人としての本分も教えてくださいました。私たちは神、人に対して、自分に対して、物事に対して一定の本分を持つべきです。重要なポイントをここで分かち合いたます。

1,結婚

結婚は本来人生の大きな出来事であり、霊におる意味でも重要です。結婚に慎重でないと、自分だけじゃなく、子孫にも影響を与えます。決して勝手に決めてはなりません。神の喜びと祝福を受け取り、結婚を楽しむように、神の御心に従って選び、決め、扱わなければならないです。

結婚はもともと神が定められたものですが、人が罪を犯した後、多くの混乱と堕落が発生しました。だから、対象を選ぶ時、異邦人と結んではいけません(創世記 24:3,4;ヨシュア 23:12,13;コリント二 6:14-16;コリント一 7:39,9:5)。結婚の目的とお互いの扱い方について、お互いに助け合い(創世記 2:18)、キリストと教会の関係のように愛し合い、尊敬、従いなどが聖書に明確に書いてあります(エペソ 5:22-33;コロサイ 3:18,19;ペテロ一 3:7;コリント一 7:3-5;マラキ 2:15,16)。離婚、別居などに関しても明確な教えがあります。(マタイ 5:31,32 ;19:3-12;コリント一 7:8-17)

2,家族

家族は人類の生存、生活、そして幸福、道徳に深い関係があり、聖書にはこれに対して多くの教えがあります。親と子の間には互いに接する本分と原則があります(エペソ 6:1-4;コロサイ 3:18-21)。子供を教育しないのは今の社会で混乱と罪悪が発生する主要な原因の一つです。主の戒めと警戒に従って子供を育て、必要な時にはしつけ、叱責しなければなりません(申命記 6:7;箴言 13:24;19:18,22:15;ヘブル 12:5-8)。

3,交友関係

主を信じたら世を友とするべきではありません(ヤコブ 4:4;コリント二 6:14-16)。クリスチャンと交わり、世俗人情のような関係に落ちてはいけません。世には友らしい見せかけの友があり、悪い交わりは、よいならわしをそこないます(箴言 18:24:コリント一 15:33)。口を大きく開いて歩く者、怒る者、酒にふける者といった者たちと交わってはなりません(箴言 20:19;22:24;23:20;24:1)。お互いに励まし、問題を指し、心を合わせて祈ることができれば親友と言えます(箴言 27:6,9,17;ダニエル 2:17, 18)。

4,職業

職業も人生の大事なことです。昔の人の仕事は工、農、商などで、比較的簡単でした。聖書には畑を耕し、羊を飼い、魚を釣り、大工、テントを織る仕事が書いてあります。現在、仕事、職業が多すぎて、クリスチャンの身分と合わない職種もあります。例えば、タバコショップやホテルを経営したり、投機商売をしたり、不正な事業を経営したりするなど、良心を不安にさせ、人の利益にならず、神の光栄を現わさないことをしないください。時には無意識に受動的に従事しても、このために祈り、離脱でき、道を開いてくださるように神に求めてください。自分の手で働き、稼ぐのが一番いいですが、人に雇われてもいいです。奉仕に矛盾せず、常に感謝と賛美を神に捧げてください。

（三）生活原則

クリスチャンの生活は自分の幸福、喜びに関係するだけでなく、主の証人として他の人にも影響があります。生活の範囲は広くて、私たちの衣、食、住、社交活動、時間とお金の使用などが含まれています。神も私たちの生活に関心があり、しきりに私たちを見ています。

1,衣、食

人が服を着るのは本来恥を隠すためです(創世記 3:7,10,21;9:23)。クリスチャンの服装は朴素、正派を原則としなければならないです(ペテロ 3:3,4;テモテ 2:9)。特に女性は、華やかさや美しさにこだわりすぎてはいけません(イザヤ 3:16-24)。神の栄光を現し、人の益になるように清くて敬虔でイエスらしいという印象を与える服装を選ぶほうがいいです。女性が男性の服を着、男性が女性の服を着るのは神に忌み嫌われています(申命記 22:5)。体のある部分を露出して、人の悪い思いを引き起こすのは間違っています。

食事はもともと体のニーズを満たし、人の生命、健康を維持するためのものです。こだわりすぎたりするのも間違いです(ヘブル 13:9;ピリピ 3:19)。神の栄光を現し、人がつまづかないことを原則としなければなりません(コリント一 10:31,32;ローマ 14:17-21)。信者は何でも食べることができますが、血や偶像を祭る用のものと分かったら食べてはいけません(使徒行伝 15:20;コリント一 8:9-13:10:20,21;ローマ 14:2,14,22-23;テモテ一 4:3,4)。貪食と泥酔はよくないです (ルカ 21:34)。

2,住、行

クリスチャンはこの世には寄留者で、住む場所にあまりにもこだわってはいけません。豊かで堂々とするものを追及したり、浪費したりするのは私たちが従う、ともに歩む主に合わないです。普段の出入りや旅行には人並み以上にならないようにしていきましょう。皆が宣教師デドソンのように、なぜ三等車に乗ったのかと聞かれたら、四等はないからだと言えないわけではないですが、簡素と安全を原則としたほうがいいです。

3,投資信託

クリスチャンが最も気をつけなければならないのはお金の問題です。パウロは「ただ衣食があれば、私たちはそれで満足すべきです。富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、信仰から迷い出て、多くの苦

痛をもって自分自身を刺しとおした」と言いました。お金持ちになることは必ずしも良いことではありません(マルコ 10:23,24)。正当な方法でお金を稼ぐのはよいですが、宝を地上に蓄えるのではなく、天に蓄えるのです。人の宝のある所には、心もあるのです(マタイ 6:19-25;19:21)。私たちの心は天にあるべきです(コロサイ 3:1-4;ペテロ一 1:3,4)。私たちのお金はすべて主のもので、完全に主のために使うべきです。1/10 を倉庫に送るだけでなく、残りも主のお金で、私たちはお金の管理を主に頼まれました。御心によってお金を管理しなければなりません。

４，行動

クリスチャンはキリストに属すものです。もはや自分に属しておらず、異邦人のように、肉とその思いとの欲するままを行ってはいけません(エペソ 4:17;2:2,3)。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩かないといけません(エペソ 4:1;使徒行伝 26:20;ピリピ 1:27;テサロニケ一 2:12)。つつましく行い、光の子らしく歩きなさい (ローマ 13:13;エペソ 5:8)。聖霊に頼って主に従って歩きなさい(ガラテヤ 5:25;ヨハネ一 2:6;コロサイ 2:6)。すべてのことは、わたしに許されています。しかし、すべてのことが益になるわけではありません。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはないです。飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。(コリント一 6:12;10:23,31)。人をつまずかせない で、共に福音にあずかるべきです(ローマ 14:21;コリント一 9:23)。大切なのは新たに生まれた人になることです。あなたのすることはすべて、言葉によるとわざによるとを問わず 、主イエスの御名によって父なる神に感謝を捧げることです。(ガラテヤ 6:18;コロサイ 3:17)